

イヌ人間と人間イヌ
ー徳島県海部郡海陽町におけるヒトと猟犬のアッサンブラージュー

第1章 はじめに

- 第1節 研究目的
- 第2節 研究の背景
 - ードメスティケーション研究の変遷
- 第3節 先行研究
 - ーヒトと非ヒトの相互行為とは
- 第4節 調査対象
- 第5節 研究方法

第2章 調査対象概要

- 第1節 海陽町
- 第2節 旧海部町猟友会
- 第3節 犬猟に関する先行研究
- 第4節 犬猟概要

第3章 犬猟の場における相互行為

- 第1節 事例による検証
 - ー犬猟の場におけるヒトとイヌの相互的な働きかけ
 - 1. 「いつもどおりに」山を登る
 - 2. 搜索開始の合図
 - 3. 寄り添うイヌ
 - 4. 猟終了の合図Ⅰ
 - 5. 猟終了の合図Ⅱ
- 第2節 小括
 - ー「共在感覚」をもつ

第4章 猟犬の「訓練」の意味

- 第1節 猟犬育成における訓練概要
- 第2節 事例検証
 - ー初期訓練と後期訓練との比較
 - 1.イノシシを怖がるイヌ
 - 2.母犬を使って噛ませる
 - 3.集中力の欠けるイヌ
 - 4.後期訓練

第3節 小括

ーイヌは何を学ぶのか

第5章 ブリーディング

第1節 猟犬の評価基準

第2節 猟犬に求められる行動

第3節 ブリーディング方法

第4節 外部のイヌとの繁殖

第5節 小括

ーブリーディングの機能とは

第6章 結論

第1節 まとめ

ー犬猟の場における縦と横のアッサンブラージュ

第2節 考察

ードメスティケーションの「積極的な」かかわりあい

参考文献

第1章 はじめに

第1節 研究目的

「犬猟」とは、猟犬による獲物の搜索や捕獲に頼った狩猟方法のひとつであり、そこでは人とイヌの協力関係が不可欠である。筆者が初めて犬猟に参加したとき、その場における人とイヌの関係性に強い違和感を覚えた。そこには「人の指示でイヌが動く」という筆者のイメージとは程遠く、イヌが自由に山中を走り回り、むしろ「人のほうがイヌたちに指示されている」かのような人とイヌとの関係性があったからである。実際、筆者が最初に参加した猟では、途中で猟犬がどこにいるのかわからなくなったため、猟は中断され「イヌ探し」へとシフトした。このようにイヌに対する人間の制御は筆者が想定したよりも強くなかったにもかかわらず、「犬猟」は成立しており、猟犬の繁殖・育成も何世代にも渡って繰り返されている。とはいえ山を駆け回るイヌは「自由」に見えるものの、あくまで人間が狩猟をおこなう際の「道具」として用いられていることは明らかである。とはいえ、そこでの人とイヌの間には、単に人が対象物を一方的に訓化・利用するのではなく、「相互行為」と呼びうる特定の関係性が存在しているようにも思えた。そこでは、人とイヌという種を異にする生物がどのような協力関係を再生産しながら、いかに狩猟という相互行為を成立させているのだろうか。本研究では、犬猟の現場における人とイヌとの関係性を分析することで、どのようにして犬猟という「相互行為」が構成されているのか検討する。また犬猟を通時的に見た場合、人とイヌの寿命は有限であるために、こうした現場における相互行為の技法は人とイヌの双方によって再生産される必要がある。このため本論では、犬猟という「相互行為」の再生産にとって重要な猟犬の繁殖・育成過程についても検討する。このように狩猟の場における人とイヌの関係性という共時的な側面と、そうした関係性の再生産に関わる「人からイヌへの働きかけと応答の繰り返し」という通時的な側面を検討することを通じて、人間と非人間の間を展開する相互行為（アッサンブラージュ）という観点から、イヌのドメスティケーションの過程について考察する。

第2節 研究の背景—ドメスティケーション研究の変遷

社会学者のハラウェイ（2013）は、現代社会においてペットとして飼育されているイヌとヒトは、「重要な他者性（significant otherness）」で結ばれているとした。「重要な他者性」とは、『『重要な他者—性』と『著しい—他者性』、すなわち、かけがえのないパートナーであることと、それにもかかわらず互いに無視できない他者性を有していることという、二重の意味が仕掛けられている[ハラウェイ 2013:7]」。このハラウェイの「重要な他者性」の概念を、奥野（2015）はマレーシア・サラワク州の狩猟民プナンの犬獺を事例に具体的に示した。プナンのイヌは、飼育動物とも野生動物とも異なったカテゴリーに属する。これはイヌの方から人の元にやってきて一緒にいるという口頭伝承があるからだ。この特殊な存在であるプナンのイヌには「身体、魂、名前という三つの構成要素」がそろい、「その存在は人間（*kelunan*）である」と考えられている。さらにイヌは、夜の寒さには暖を与え、赤ん坊の排泄物が付着した肛門から汚物を取り除くなど、「人間にとっては他者であるが、別の他者として獲物を手に入れるための道具」であり、「自然」と「文化」を媒介する存在であるともいえる[奥野 2015]。

生物学の観点からも、イヌは祖先種である野生動物を人が飼うことによって生み出された動物であるが、「イヌ」となった瞬間から人と関わりを持つという「不自然な動物[薮田 2014]」として扱われてきた。

イヌの祖先に関しては、オオカミとする説や、オオカミにジャッカルやコヨーテの血が混じったとする説、ディンゴのような原始的なイヌに似た生物から進化したとする説など長い間論争的になっていたが、現在では社会性の強さや吠え声の複雑なパターンなどにおけるイヌとオオカミの類似や、分子系統的にみる両者の強い近縁性から、オオカミであるとする説が定説化している[内山 2014]。また、イヌの遺体は、1 万数千年前以降の人類の生活跡から出土される考古学的資料からは確認されているため、少なくともこの頃までにはオオカミからイヌへの家畜化の始まりとみなせるような、人とオオカミとの散発的な接触が始まっていたと考えられる [内山 2014]。

動物行動学者であるコンラート・ローレンツは、多くのイヌの祖先をジャッカルとみなした上で、食糧の残り滓を目当てに人の後を追ってきたジャッカル群れに、人が衝動的に食べ物を分け与えたり、親からはぐれた仔を集落内で育てたりしたことが、家畜化の契機になった可能性を指摘している[Lorenz 1966]。また、最近ではオオカミが人間にすり寄ったという説もある。これは人間の居住地の隅にあるゴミ捨て場をあさることをきっかけとして、大胆で人懐っこいオオカミだけが受け入れられたとするものだ¹。こうした説はあるものの、イヌの家畜化の全貌はいまだ明らかになっていない。

イヌに限らず、ウシをはじめとする有蹄類などの野生動物の家畜化は、人類史にとっての大きな転換点であったため、その起源をめぐって様々な分野で研究が進められてきた。有蹄類の家畜化過程に関する人類学的な研究をおこなった谷によれば、野生動物の「家畜化」の過程を理解するためには、それが<いつ>、<どこで>、<いかにして>行われてきたか理解する必要があるが、それらのなかでも<いつ>、<どこで>に関しては残存遺骨のあり方の変化から推定できたにしても、<いかにして>という問いについては、これ

¹ (<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/7644/>) 参照

らの証拠からただちに推定できるものではないという。これは、道具を介さない家畜管理の技法的介入等は、考古学的に補填可能な物的証拠を残さないためである [谷 2010]。また、考古学的資料から家畜化過程について検討する場合においても、「家畜化過程にあると判断できるようになるのは、一般に、人からの介入が一程度以上に達した段階、すなわち“複数世代にわたる所有意識が発生し、生きた状態で拘束され、生殖管理や利用内容にある程度の規則性が生じ始めて以降の段階” [内山 2014:5]」としており、その前段階の過程が潜在していることを考慮しなければならない点が指摘されている。このくいかにして>家畜化が開始されたのかという問いを考える際に、文化人類学的方法論によるドメスティケーション研究が有効である。「ドメスティケーション」とは、一般に野生動物の家畜化、野生植物の栽培化を指し「生物種の種維持のための生殖過程への人間による介入 [松井 1997:66]」として理解できる。そこでは、現在の狩猟採集民や牧畜民、あるいは農耕民の動植物に対する働きかけに関する現地調査にもとづき、ドメスティケーションの起源について推定可能な資料を提出することで、人類史における人と動植物との関係性の諸相について考察してきた。

このドメスティケーションの捉え方は歴史的に変化、あるいは様々な考え方が共存してきており、はじめは、“domestication”の語源である「家(*domus*)」に存在するものとして、あくまで人が主体として動植物を馴化したものであり、過程よりも結果を重視した用法がなされていた。その後、人を主体としている点には変わらないが、ドメスティケーションと言う語が、人がある種の動物や植物を人の生殖管理下に置くようになるまでの一連の過程をも含めて指す場合が多くなってきた [重田 2009:72]。そして重田は、特にドメスティケーションを「関係」、つまり異種生物間のすりあわせの関係と定義し、現在を含む野生植物の栽培化過程では、人が植物を一方的に馴化したというよりも、人と植物が相互的な関係にあると理解した方が良く論じた [重田 前掲書]。このドメスティケーションをめぐる人間と異種生物間の“すりあわせ的关系”という概念を最初に提出したのは谷 [1995]であった。谷は、動物の家畜化においては、野生段階では許容しなかったはずの介入を動物の側が許可するという、動物の側での対応的变化を伴う点を強調した。もちろんこれは、家畜化された動物が、本来持っていた自発的行動のすべてを人の管理に委ねるわけではない。だが、人はなんらかの意味で、恒常的な介入が可能ないように、動物を自己の手元に繋ぎとめる努力を払わなければならない。さらに、多くの家畜化された動物が、放置しておくとも再野生化することを考慮すれば、常に人は動物に対して、接近や接触を許容するといった、親和性を維持する介入を繰り返さねばならない。すなわち家畜化とは、介入と介入許容という人間と動物の相互的すり合わせを通じて、一連の人為的技術行為の連鎖のなかに、当該の動物種を、自発性を維持しつつ、組み入れることであるといえる [谷 1995]。

また、半栽培植物と言われるスイタクワイをめぐる人-植物関係の諸相に関する研究をおこなった坂本 [1995]は、ドメスティケーションを「漸進的な過程 [坂本 前掲書:18]」として捉え、植物のドメスティケーションの過程は、「栽培植物と人間の共生関係の成立過程 [坂本 前掲書:18]」と捉えた。「半栽培」とは「野生植物の利用段階から栽培植物にいたる中間過程 [中尾 1976:23]」である。坂本 [前掲書]は、この半栽培状態である植物のなかには、人間の植物に対する積極的な働きかけ、つまり「人間の文化」が存在すると結論付けている。

これに対し重田[2009]は、「半栽培」という言葉の含意するヒトの主体性や意図性の問題を指摘した。『栽培』とはもともとヒトの意図を含む用語であり、『栽培化』という場合、結果の状態（栽培）を指している。また、半分栽培されているものから全部栽培されているものへの変化を指向している。そして、その変化を起こさせる主体はヒトであることが了解される[重田 2009:81]。だが、ヒトは栽培化の過程にある植物を必ずしも意図的に保護してはいない。この人間と植物とのあいだの（ヒトの側の）非意図的な共生関係に「半栽培」という語を当ててしまうと、「半栽培」の中の「栽培」の言葉から、人が植物を栽培しようとする意図、保護しようとする意図が見え、誤解を招きかねない。そこで重田は「半栽培」段階について、それが特殊な人と植物の関係の状態（共生関係のひとつ）であることに留意し、新たに「関生」という語をあてた。この関生状態においては、人との関係により植物の生存価は高まること、また、関生植物は自力で繁殖でき、人との関係を断っても生存価は下がらないことを特徴とし、「関生化」とは「野生」あるいは「栽培」の状態にある植物が人と「関生」するようになることを指す。この「関生化」の現象を明らかにしていくことで自然と文化の理解に対する生態学的なアプローチを目指した[重田 前掲書]。

さらに松井は、これまでの議論では欠けていた、動植物双方に適用できる分析装置としての概念、ドメスティケーションのもつ生物側の形質上の変化と人間からの介入という二重の含意をうまく連続させる概念を取り入れるために、新たにセミ・ドメスティケーションという概念を提出した。セミ・ドメスティケーションとは、「動植物がドメスティケーションの過程にありながら、未だに完全に家畜や栽培植物といえるものにはなっていない[松井 2011:23]」ことを意味する。また、セミ・ドメスティケーションの特質として、松井は、動植物においては、人からの介入が全面的ではなく、保護や簡単な世話など動植物の全生活史において人の役割は限定されているのに対し、人においては少数の生物種の豊かさに依存している点、またそのような人からの一方的な依存・利用にもかかわらず、その状態が持続的で安定的な平衡関係が成立している点を述べた。

すなわちセミ・ドメスティケーションとは、必ずしも野生種と家畜の中間的遷移的な形態を示すわけではない。東南アジアのブタのように完全に家畜や栽培植物になっているかにも見えても、再野生化の可能性があるし、栽培植物も逸脱して野生化してしまうものも多い。したがって、このセミ・ドメスティケーションは、「野生の状態から、完全な家畜、栽培植物までの広い領域を示す [松井 2011:23]」ことになる。そして、この状態は「人間の側の介入活動のあり方によって支持されるだけでなく、同時に、生物の側からの広い意味での受容や反応 [松井 2011:30]」によっても大きく支えられている。この意味で、セミ・ドメスティケーションとは、生物のあり方と人間の活動のあり方の双方にまたがる広い概念である。さらに、「セミ・ドメスティケーションとして新たに借定した特異な人間＝動植物関係の相は、現在においても考察されうる [松井 2011:47]」ものであり、「現在における生業＝生活様式の区分を再考する際にも、きわめて重要な示唆を与えてくれる [松井 2011:47]」のである[松井 1997,2011]。

このようにドメスティケーション研究は、過去における人の動植物に対する一方向的な働きかけという認識から、現在進行形の人と動植物の相互的な関係と捉える見方へと変化してきた。本稿でも、イヌのドメスティケーション過程を、過去の人の側からの一方的な働きかけとしてではなく、現在進行形の「相互的すり合わせ」の過程として捉える。そし

て、徳島県海部郡海陽町でおこなわれている犬猟を事例に、ヒトとイヌがと「相互的すり合わせ」をおこなう過程を考察する。そのために、犬猟という人とイヌの相互行為をめぐって、人がイヌのどのような点に注目し、どう介入していくのか、またそれに対してイヌがどのような反応を示しているのか、またイヌからヒトへの働きかけはどのようなものがあるのか検討する。

第3節 先行研究—ヒトと非ヒトの相互行為とは

本論は犬猟をめぐる猟師と猟犬の相互行為について検討していくが、そもそも「相互行為の場」とはどのようなものなのか。猟師と猟犬を人間と非人間と考えると、そこに人同士の会話のような「相互行為」が存在すると素直には言いがたい。すなわちヒトとイヌの「相互行為」について検討する前に、まず本論において「相互行為」と見做すものがいかなるものか整理する必要がある。

従来の「相互行為」研究の対象は人同士を前提としており、さらに1つの部屋の中の会話や電話の会話などの対面状況における出来事が多く取り上げられてきた。これは「コミュニケーションは『対話 dialogue』をモデルにして捉えられるべきである」という欧米的な会話文化に基づく偏見による。だが、木村が事例としてあげたコンゴのボンガンド社会での会話は、欧米的な対話モデルには必ずしも当てはまらない。それを象徴するのが「拡散的会話場」での会話である。ボンガンド社会の人々は遠距離での伝達の際木製の打楽器であるトーキング・ドラムを用いて非対面的な伝達を行うことがある。この方法だと、音は数十キロ四方へと伝わり、肉声においても、日常的に200メートル先でも聞こえていた。このような状況の会話では、「誰が誰に対して話しているのかは容易に決めがたい」。このようにして生じる「広範でかつ伸び縮みする会話場」を木村は「拡散的会話場」と呼んだ。この拡散的会話場では、トーキング・ドラムの音はそこにいる数百人・数千人に聞こえているが、そのすべての人と「相互行為を行っている」とは捉え難い。

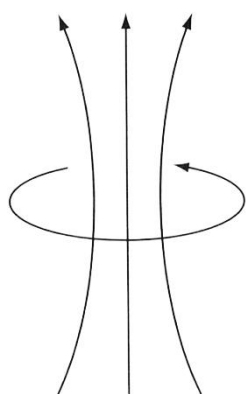


図1-1 行為（縦の線）と枠（横の輪）の相対図式 [木村 2003:276]

では、「相互行為」の成立には何が必要なのか。木村はその前提として二つの要素があるとし、まず、双方に潜在的な「ある種の『身構え』ができていいる』状態である「相互予期」をあげた。「目と目が合う」という状態は、この相互予期がよりはっきりしたかたちであり、それは「ある種の強烈なつながりの感覚」を生成する。次に、この予期の分岐には、「行為の『枠』と呼びうるような社会的な力』が働いているとし、この枠を「共在の枠」と呼んだ。たとえば電車内での女子高生の会話を素知らぬ顔して聞くといった「儀礼的無関心」では、その場に居合わせた乗客が共有しているのが「枠」であり、他の行動をしないという選択の結果が「素知らぬ顔をする」という行動なのである。

そして、この『行為の予期の分岐』と『共在の枠』は、予期の分岐の中から一つの行為を選択することによって枠が生成し、そして、枠は行為の方向性を決定する、という形で、互

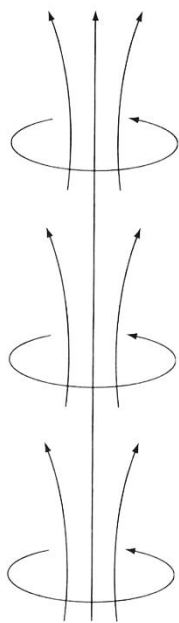


図 1-2 行為連鎖と枠
の時間的変動 [木
村 2003:277]

いが互いを生み出す [木村 2003:275] 関係性を持っている。そして、この、物理学や数学において使われる「双対性 (duality)」の概念を利用した「双体図式」(図 1-1)は、行為連鎖と共在の枠の通時的／共時的な関係性をうまく示すことができる。すなわち相互行為の場は、「行為連鎖の可能性はある時点で分岐するが、それはその中から実際にある一つの行為が選択されること、すなわち「枠」が作られることによって収斂する。しかしその枠を媒介にしてまた次の行為が生成され、可能性が分岐する。相互行為の道行きの中で起こっているできごとは、この繰り返し [木村 2003:276]」(図 1-2)なのである。木村は、この相互予期と共在の枠を共有した、「共にある態度」を「共在感覚」と呼んだ。「相互行為」は、この「共在感覚」として定義できる。

しかし、この理論は人同士の「相互行為」を前提にしている。だが、はたして「相互行為」とは、人同士でないと成り立たないのだろうか。ベイトソンは、A が B に対してメッセージを送る行為を分析するにあたって、その行為の観察者の視点を挿入した。本来「この送信の目的は (A と B の視点からすれば) A の送信用紙に最初に現れたのと同じの文字列を、B の受信紙上に再現すること [ベイトソン 1972=2000:542]」である。しかし、観察者から見れば、A が発信したメッセージをすでに見ているので、その

後で B の用紙を見たところで、メッセージに関する新しい情報は何も得られない。すなわち「冗長(redundant)」な情報である。このように観察者を含めた視野で「相互行為」を捉えると、そこには冗長性が蔓延している。ベイトソンは、そのように冗長性を含みこんだ A と B の行為の全体を「A と B が演じる『ゲーム』」と呼んだ。そして木村[2015]は、この冗長性を含みこんだ“ゲーム”を「行為のもつれ」と再定義した。「相互行為」における「ゲーム」=「行為のもつれ」には、ある種の規則性がある。だが、この規則性はある程度予期できるものの、その先はどちらか一方が決めることは出来ず、実際どうなるかは不透明である。このような行為の規則的なもつれの状態には、送り手と受け手の同質性・対称性は要請されない。それゆえ、非対称な人間と動物、人間とモノや異種動物間あるいはモノ同士が行為を「もつれ合わせる」ことも考えられる。

「行為のもつれ」は、ある瞬間、ある場面における相互行為として理解できる。しかし、そのような特定の相互行為のあり方が生み出され、継続される機序はいかなるものだろうか。人間と非人間の間を生起する特定の相互行為をめぐる通時的側面を理解するために、本論では「アッサンブラージュ」という比喩的イメージを用いる。

アッサンブラージュは、日本語では「アレンジメント」あるいは「配置」と訳され、このアレンジメントは多様なエージェンシーの働きが記されており、それ自体に動きが内在されている。しかし、内山田[2011]は「動くアッサンブラージュ」の問題を考察している。これは、例えばマリノフスキーが論じたクラの財貨が当てはまる。トロブリアント諸島における貝製の腕輪と首飾りの交換である「クラ」の交換システムは、品物の所有による名声の獲得、クラによる部族間のつながりなどを生み出した [Malinowski 1922]。クラの財

貨は、「モノを媒介とした人と人（あるいは人を媒介としたモノとモノ）の交渉の過去と未来を内包した、動くアッサンブラージュと見ることができる [内山田 2011:3]」。この動くアッサンブラージュでは、アクタントとアクタントの縦と横の二層構造の関係を見ることができる。この同盟関係は、「進化の過程の中で進行」しており、この同盟が作るアッサンブラージュは、時間の中で姿を変える。

この動くアッサンブラージュについて吉田（2011）は、バリの仮面劇トペンを「具体的な人とモノとの相互作用によってたちあがるアッサンブラージュ [吉田 2011:11]」と捉え、演者と仮面の間の主-客の攪乱がいかんしてなされるのか、また、「仮面としての物としての性質が、トペンにおける仮面の働きに、いかに作用するのか [吉田 2011:13]」を考察した。ここでの仮面は、演者の顔を隠したり、息をさえぎったりと「木片」として演者の身体に働きかける。しかし上演されると演者が役に没頭するのを助け、「生き生きとした顔」として働きかけ、「操り人形」となった演者は、人のようでもあり、モノのようでもある。また、上演中は演者や過面だけでなく、楽器、演奏者、観客という多くのアクタントが集まり、それぞれが互いに作用することでトペンは成立している。この「トペンというアッサンブラージュの中にみてとれるのは、誰／何が出発点と断定することもできない、働きかける者／モノが、多層的に反復的に連なる図式 [吉田 2011:27]」であり、空間的に広がる「横のアッサンブラージュ」として捉えることができる。そして、この仮面の物性は、演者と仮面が上演を重ね芸の魅力を増してゆく、時間軸上に広がる「縦のアッサンブラージュ」としての存在をも可能にする。この縦と横のアッサンブラージュは互いが互いの一部であるような関係であり、トペンの上演とは、「このように、過去からの人・モノの動きを含みこみ、また、未来への期待や予感をも帯びたアッサンブラージュなのである [吉田 2011:28]」。

このような吉田の考察は、A.ジェル[1998]の方法論に影響を受けている。ジェルは、芸術作品の中と、その周囲に生ずるエージェンシーの働きに焦点を当て、作品が仕事をする仕組みと、その効力を考察しようとした。ジェルの芸術の人類学は、作品を「インデックス（推論を喚起する物理的な存在）」とすることで、作品を美の表現、あるいは意味を伝達する視覚言語として理解するのではなく、作品に対面するパーソンの「アブダクション（ある状況で、そのケースを包含するような一般的な法則を仮定した上での推論）」によって、過去の仕事の把持、未来への予持を胚胎した技術の問題として取り上げる。このように作品を「インデックス」として捉えると、環境と時間の中で作品のエージェンシーが四次元的に広がるとした [Gell 1988; 内山田 2008:6]。先の吉田の仮面であれば、仮面に施された儀礼、繰り返し捧げられてきた供物、自分や別の演者と演じてきた数々の経験などの過去の歴史が、演者に対し畏怖や愛情を喚起するインデックスであると捉えられている。今演じている上演も一つの経験となり、さら未来の上演の魅力を支えるのである [吉田 2011:28]。

このように、ヒトと非ヒトの「相互行為」に関する議論は従来の西欧における二元論的な視点から変化してきている。本稿でも、木村の定義に従い犬猟における猟師と猟犬の関係を「相互予期」と「共在の枠」を双方がもつ、つまり「共在感覚」を共有した相互行為と捉える。犬猟の場において、猟師が猟犬のリードをとった瞬間、猟犬は猟師を置いて獲物の搜索に走り出す。このとき猟師は慌てる様子もなく山道をそのまま進む。ここでは猟

犬が逃げ出したというような一方的で、予期しない展開だったのではなく、リードを外すという行為が暗に走り出す行為を示唆しており、そのうえで猟犬は走り出し、猟師はそれを見守るという行為が発生している相互行為であると言うことができ、この相互行為の連鎖で猟が成り立っているのだと仮定することができる。この仮定を具体的に実猟の場面を分析し検証することで、イヌの家畜化が<いかにして>行われてきたのかを考察する。

ドメスティケーションにおける相互行為について、従来の議論では、動植物側からの働きかけに関しては、谷（2010）の「介入許容」という言葉からも明らかのように消極的な意味での働きかけについてしか語られてこなかった。重田や松井による議論に関しても同様で、「関生」状態の植物は、自力で繁殖でき、人との関係で生存価は高まるが、植物側からの「応答」という意味での働きかけについてしか述べられていない。松井（2011）に関しても、セミ・ドメスティケーションの関係は人からの一方的な依存に対し、「生物の側からの、広い意味での受容や反応 [松井 2011:30]」があることで持続的で安定的な平衡関係が成立しているとしているが、これは人からの介入が先にあり、それを許容するという受動的な態度が前提としてあることが読み取れる。しかし、本研究の対象であるドメスティケートされた猟犬と人とは、冒頭にも示したように「人の方がイヌたちに指示されている」かに見える関係にあった。この関係は、人の介入に対する猟犬の「介入許容」という言葉で十分とは言い難い。

そこで本研究では、犬猟の場を人とイヌの相互作用によってたちあがるアッサンブラージュとして捉える。アッサンブラージュはモノに対しての比喩的イメージであったが、人の手によって支配されているものが、人に働きかけるという点ではモノも家畜も共通している。そして、この犬猟の場においては、その場の相互行為で完結するものではない。過去の人とイヌの交渉の歴史があって、今日の猟が成り立っている。こうした点を見るにあたって、アッサンブラージュという概念を用いることで、空間的で共時的な相互行為だけでなく、時間軸上に広がる通時的な関係性にも触れることができる。また、このとき人間と非・人間が互いに物質=記号として働きかけあうというジェルの視点を用いて猟犬をインデックスとして捉え、猟犬に内包された人とイヌの関係性を明らかにしていく。そして、イヌの家畜化が<いかにして>行われてきたのかを、従来の「介入許容」という消極的な相互行為ではなく、より積極的な意味での相互行為として捉えなおしていく。

第4節 調査対象

主な調査対象は徳島県海部郡海陽町の旧海部町猟友会とし、旧海部町猟友会会長の乃一俊治さんを中心に調査を行った。現地調査は2015年5月10日、6月13~14日、9月2日、5~6日、27日、10月11日、12日、28日の計8回、のべ10日間行った。調査内容は乃一会長や娘の智恵さん、優美さんほか、小松島の猟師の方々への猟犬の特徴や飼育方法などの聞き取り調査、実猟と猟犬の訓練大会の参与観察を行った。

第5節 分析方法

実測および訓練の場における人とイヌの相互行為の具体的な分析手法としては、エスノメソドロジーの手法を用いる。エスノメソドロジーとは、ハロルド・ガーフィンケルが1967年に自らの研究に名をつけるため初めて用いた言葉で、「社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究 [ガーフィンケル 1987:17]」である。このエスノメソドロジーの手法を用いる理由としては、エスノメソドロジーでは会話だけでなく、視線や動き、道具との関係など多様な面から分析を行い、人とイヌという単純に会話が成立しない関係であっても多様な面から見ることによってより詳細な分析が可能となるからである。

例えば視線は志向を最も先鋭的に表現する。満員電車の中で、自分の前に人が立っていたとする。たいてい背中を向けているだろうが、仮に前面がこちらを向いていたらどうだろうか。背中が自分の前にある時の方が、自分の領分の侵犯されている感覚は、はるかに弱い。さらに、その人の顔が自分の顔の前におかれている場合はその感覚は強まる。逆に、距離は離れていても、顔を前から指差す、顔を睨みつけるという行為は、相手への強い侵犯とみなされることから、視線や指差しの志向の強さを示している。この目において表現される志向の進路を「視線」と呼ぶように、西阪はそれぞれの身体部位において表現される志向の進路を「志向線」と呼んだ [西阪 2010:41]。

また、視線の向う場所が「視野」と呼ばれるように、西阪は志向線の向う場所を「志向野」と呼んだ。例えば鉛筆で文字を書くときには、手がかかわりゆく先（すなわち志向野）は、紙の上であり、それにより手は、鉛筆を通して紙を知覚する。このとき視覚野（視野）と触覚野（手を起点として志向線の向う場所）は一致している。一方、医療者がプローブを妊婦の腹部に当てながらモニターを見る場合は、どうだろうか。医療者は、プローブに触れると同時に、プローブで妊婦の腹部に触れる、つまり志向野は妊婦の腹部にある。そしてモニターを見ているため視覚野はモニターにあり、視覚野と触覚野が一致していない。さらに、志向野へ向かう志向線は、異なるほうを向いており、超音波診断装置においては、志向野が分散しているといえる [西阪 2010:43]。このような状況で、妊婦と医療者は「相

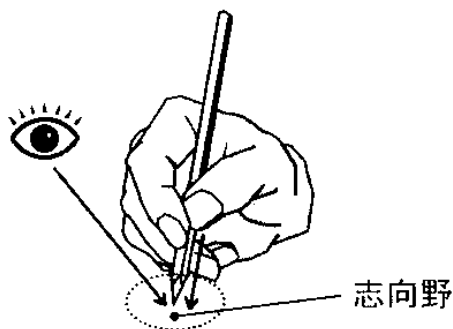


図 1-3 視覚野と触覚野が一致する。 [西阪 2010:44]

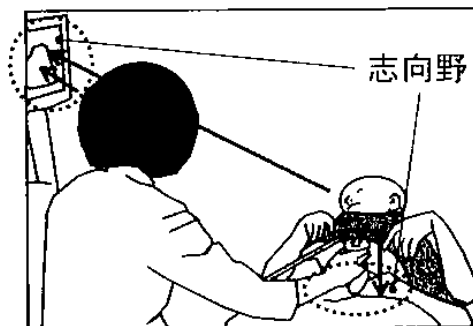


図 1-4 視覚野と触覚野が一致しない。志向線の向きも異なる。 [西阪 2010:44]

互行為空間の参加者」として捉えることができるのだろうか。

志向野には中心と周辺がある。例えば、友人が向こうの方で誰かと話しているのに気が付き、友人に向かって手を振ったとする。このとき手を振ることは友人の視覚野において行われている。何かに気づかせるためには、しばしば周辺の志向野が用いられている。道具のある環境においても、相手の身体は周辺の志向野のなかにある。妊婦の例では、医師も妊婦もモニターを見ている。確かに両者は向かい合っていないが、それでも両者の身体が互いの周辺の視覚野に十分捉えられている。さらに、医師の上半体が妊婦の方を向いているのが妊婦には見えており、妊婦の腹部が真上を向いていることは、プローブを通して医師は触覚的にわかる。つまり、互いがどう志向を配分しているのか、そのことに互いが志向できるよう、身体と道具が配列されている。本人たちが、互いの志向を志向しあっているという状況は、このような身体と道具の配列（向き）によって表される状況なのである〔西阪 2010:46-47〕。

犬猟における人とイヌの相互行為についても、この「志向」という概念は重要である。山を登る際にはイヌも人も前方を見つめており、イヌが人の周辺の視覚野に十分捉えられている。イヌも人が視覚野には入っていないがリードを通して人がイヌに触れている。イヌは山へリードをぐいぐい引っ張りながら進み、人はこの力を利用して登る。このときイヌと人が「引っ張って進む／引っ張られて進む」という参加フレームにおいて行われる。しかし、下山するときはこの逆の関係となる。イヌは人の斜め後ろをついて歩くため、イヌと人が「ついて歩く／先導して歩く」という参加フレームに変化している。この変化は下山ではイヌに引っ張られるとこけてしまう危険性があるという下り道（環境）も関係している。このように環境、発話、身振りが並置される時、新たな構造が獲得される。そしてこの構造化は、特定の参加フレーム、つまり、特定のやり方で、環境及び他の身体に対して志向が配分されることによってのみ、それは可能である〔西阪 2010:55〕。

本稿でもこのような環境、発話、身振りを並置して、猟における人とイヌとの参加フレームの構造がどのように存在し、猟が進む中でどのように変化しているのかを明らかにしたうえで、人とイヌの相互行為の場について考察を行う。

また、犬猟、訓練の場において人による「介入」行為にも注目した。同様に人による家畜への働きかけに注目した太田（1995）は、トゥルカナ地区の牧童によるヤギ群の統率がどのように行われているのかを把握するため、牧童の一日の統率行動を記録し、放牧時間と統率行動の時間を比較した。その結果、「放任期間」に相当する時間帯において、ヤギ群に対して牧童が統率行動をとった時間が 1.28%という、統率行動をとっている時間のほうが、ヤギの自律的な移動にまかせる時間よりも圧倒的に少ないことを明らかにした。そして、このようにヤギが自律的に統合する要因として、人が本来意図しなかった副次的産物としてトゥルカナでの放牧システムそのものがあると考察した〔太田 1995〕。

本研究でも、犬猟や訓練の場面で人がイヌに対してどのような介入行動を、どれくらい行っているのかを検討する。冒頭にも示したように、犬猟においてイヌは山中を自由に走り回っている様子が印象的であった。仮に人の介入が本当に少ないのだとすれば、どのようにして「猟」を成り立たせているのか、その際にイヌと人がどのような関係にあるのかを検討する。

また、ブリーディングに関する分析は、谷(2010)の牧夫がもつ家畜の母子系列記憶の表を応用し、イヌの家系図を、乃一会長がこれまで飼ってきたイヌのデータや記憶をもとに作成し、検証を行った。谷は、牧夫が「(i)それぞれの個体を個別的な身体特徴、年齢、性の組からなる個体属性、(ii)その個体が母子関係で結ばれる関係対属性、そして(iii)その関係対が形成する母系ネットワークでの位置属性（どの母雌の何番目の子か）という、少なくとも三つの弁別素子で規定され、相互に関係づけられたもの [谷 2010:116]」として、牧夫に記憶されていることを明らかにした。犬猟を行う猟師は自分が飼育しているイヌであればほとんどの猟師が個別識別をし、谷のあげた 3 つの要素を、相互に関係づけられたものとして猟師に記憶されている。そこで本研究でもこれを応用して家系図を作成し、ブリーディングがどのような構造で行われているのか、どのようなものなのかを考察する。

次章では、調査対象である、徳島県海部郡海陽町、旧海部町猟友会、狩猟の一般的な先行研究を紹介する。続く第 3 章では実猟の流れを紹介し、猟の中でどのように相互行為が成り立っているのかを分析、考察する。第 4 章では猟犬がどのような基準を持って評価されているのかを考察し、その評価の場として猟犬の訓練大会についても紹介する。第 5 章では猟犬の育成過程に注目し「訓練」と呼ばれるものがいかなるものなのか検討する。第 6 章では猟犬の繁殖に注目し、これまでの飼育データをもとにブリーディングの場面での人とイヌとの関係を検討する。最後に第 7 章では犬猟をめぐる人とイヌのアッサンブラージュの特徴を分析するしながら、犬のドメスティケーションの特徴について考察する。

第二章 調査対象の概要

第一節 海陽町

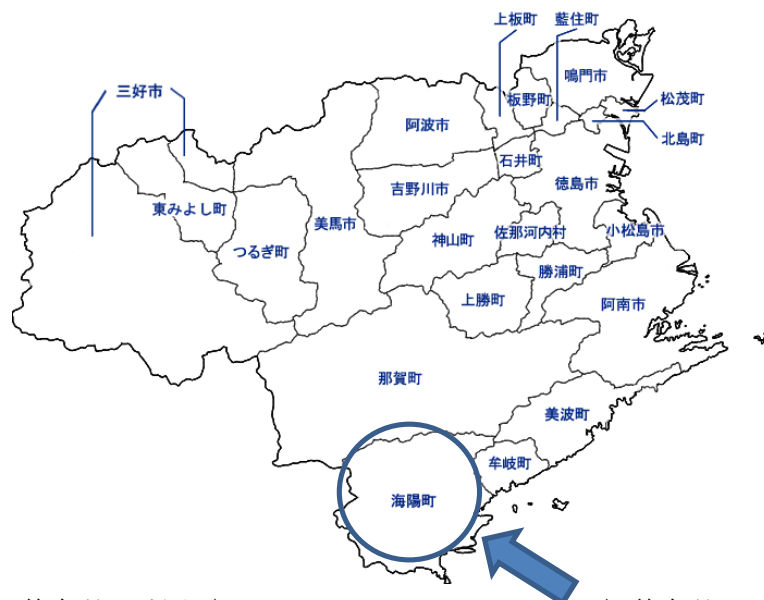


図 2-1 徳島県の地図 (<http://www.pref.tokushima.jp/>) 徳島県 HP より

海陽町は 2006 年に旧海部町、旧海南町、旧穴喰町が合併した町であり、徳島県の最南端に位置し、南東の海岸線は太平洋を臨み、北は那賀郡、東は海部郡牟岐町に、西は高知県と隣接している。北部・西部にあたる山地は 1000 メートルに及び、その山を水源として、地域の中央には北から南に海部川が、南部では西から東に穴喰川が流れ込んでいる [海陽町 HP]。海陽町は 2010 年現在、総人口が 10446 人であり、4470 世帯が暮らしている。海陽町の総人口にしめる 65 歳以上の割合は 37.3% とすでに 3 割を超えており、日本平均である 22.8% と比べ 14.5 ポイント高く、高齢化が進んでいる地域である [国勢調査 2010]。

第二節 旧海部町猟友会

猟友会とは、狩猟者のための公益団体であり、大日本猟友会のもとに各都道府県猟友会が組織されている。大日本猟友会は、野生鳥獣の生息環境をはじめ自然環境全体に強い関心を持ち、これを基本理念とし、「野生鳥獣の保護」、「有害鳥獣の駆除」及び「狩猟の適正化」を事業の基本施策にしている。また、会員が狩猟中に他人を死傷させた場合などに備えて共済事業を行っている[大日本猟友会 HP]。この大日本猟友会に下位組織として各都道府県猟友会があり、その各都道府県猟友会の支部として各地域に猟友会が存在している。

今回の調査対象となる旧海部町猟友会は、2006年に海南町、海部町、穴喰町が合併し海陽町となった以降も、合併以前の町単位で活動が行われている。会員は2015年現在19人で、銃猟免許保持者は15人、猟犬を飼っている人は6人である。猟犬の飼い主は一人につき5~10匹程度個人で育てており、イヌを用いた銃猟が中心的に行われている。会長の乃一俊治さんは娘の智恵さん、優美さんと共に猟犬を2015年11月現在15匹飼っている。旧海部町ではこのように犬猟が盛んに行われているため、犬猟をしやすいような決まりが猟友会によって整えられている。例えば、法律上は罾猟免許を所持し狩猟登録を行っていれば一人30個まで罾を仕掛けることが出来るが、この地域ではイヌのケガを防ぐために猟期は一人10個までとしている。また、イヌの治療費は猟友会が負担し、猟犬が猟によって亡くなると埋葬料として2万円が支給される。しかし、海陽町では少子高齢化が進んでいるので、猟友会メンバーも高齢化や減少傾向が進み、跡を継ぐ人がおらず犬を手放す人もいるなど、深刻な問題となっている。狩猟に対しての位置づけは副業的、あるいは趣味的に行う人が多く、自営業、大工、農家など職種はさまざまである。また、この地域の銃免許保持者は20代の若いころから免許をとっている人が多い。これは今から40-50年前は銃猟免許をとるのがごく普通のこと、猟を始めたきっかけについて尋ねると、「みんなが持っていたから」という答えも多く聞くことができた。この当時は今のように簡単に肉が手に入らなかったため、イノシシやシカの肉が手に入るという意味であこがれだったという。

第3節 犬猟概要

犬猟とは、イヌを用いた猟法であり、欧米ではイヌを獲物の場所の捜索・猟師への指示、獲物の狩り出し、獲物の回収など、それぞれの役割に特化した異なる品種の猟犬を複数頭用いることが多い。

一方、日本においては、少数の犬が総合的な役割をこなせるように訓練及びブリーディングを行っている。日本において法律で認められた狩猟鳥獣は48種類存在する。その中で猟犬を用いる猟はイノシシやシカを捕獲対象とする犬猟と、鳥類を捕獲対象とする犬猟に大別される。また、ノウサギやアライグマなど小動物の捕獲に利用される場合もある。本稿では、主にイノシシやシカといった大型ほ乳類を捕獲対象とした犬猟を対象とする。イノシシは関東以南の全域に分布しており、シカは北海道から九州まで広く分布している。現在の日本では、イノシシとシカは比較的人里に近い場所に生息していることが多い。地域の環境や文化により異なるが、シカは罾や銃をもちいて人だけで獲られることが多く、イノシシは罾猟かイヌ猟で獲られることが多い[かの 2015]。

犬猟は単独猟と集団猟の2種類に大別される。単独猟は一人で一頭から数頭の猟犬を連れて山で放し、イヌと共に獲物を追い込んで捕獲する。この猟法の利点としては、一人で行くため時間の制約がなく、別に仕事を持つ人にとってはやりやすい点がある。その一方で、一匹でこなすには攻撃性や機敏さ、かしこさ、従順さなどの能力の高いイヌが必要である点や、捕獲した際に獲物の運搬や解体などすべて一人でこなさなければならないというデメリットもあるため、集団猟の割合が高くなっている。

集団猟においては、参加するイヌの数が多くなるため、全部のイヌが合わさって必要とされる能力をクリアできればよい。それゆえ、例えば噛みの強いイヌであれば、獲物を噛まなければいけない時になって初めてリードを放し、それ以外は繋いでおくという場合もある。集団猟は、地域によっては勢子が山の四方から攻め込み、射撃をおこなう待子が山の上で待機するという、勢子が多数で待子が少数なスタイルも見られるが、海陽町の犬猟においては多数の待子が狩猟をする山を四方で囲み、少数の勢子とイヌが獣を追い立てて捕獲する巻狩りの方法がとられる(図2-2)。

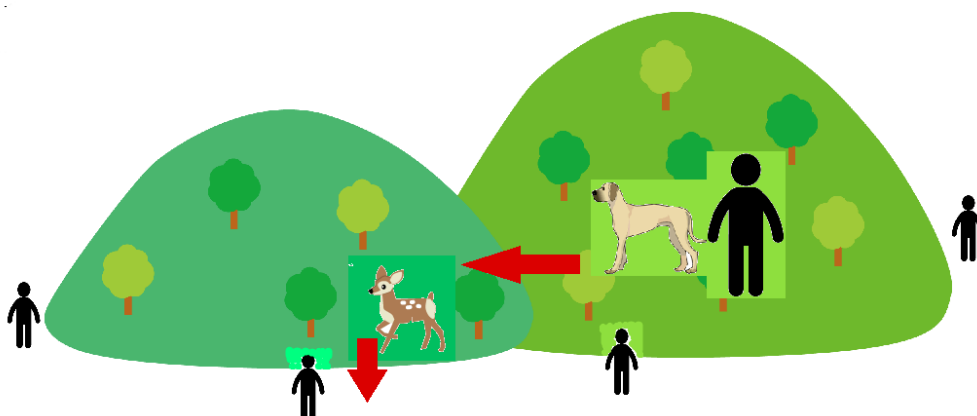


図2-2 巻狩りの構成

具体的な手順としては、まず狩猟前日に山を見回りし、イノシシやシカの足跡などの痕跡を見つけ、現在の獲物の居場所を大まかに特定する。当日に前日得た情報をメンバー内で共有し、勢子が、待子の待機場所や勢子の山へ入る場所を決め、配置につく。そのときメンバーそれぞれが無線機を持ち情報を共有、あるいは指示できる状態にある。勢子はイヌを連れて山をある程度登るとイヌを放し、「搜索」させる。「搜索」とは、獲物のにおいから居場所を突き止める能力であり、集中力や鼻の良さが問われる。そしてイヌが獲物を見つけると人に「鳴いて」知らせる。この「鳴き」とは、獲物を発見した時に吠える行為を指し、これにより猟師は獲物の位置を把握する。特に獲物を追いながら鳴く「追い鳴き」は位置把握のために重要である。こうした「鳴き」は猟師だけでなく他のイヌにも獲物があることを知らせることで、より多数のイヌを猟に参加させることが出来るため、イヌの受傷や獲物の取り逃がしを防ぐためにも非常に重要である。この鳴き声を聞いた人は、イヌに取り付けたGPSや無線機からの情報を頼りにイヌの位置を、無線でメンバーと議論しながら特定し、獲物が逃げ込みそうな場所に近くのを待機させる。そしてイヌが獲物を追いこんできたところを銃殺、あるいは刺殺する。

次に獲物の追い込み方について説明する。過疎高齢化が進む徳島の中山間地域である海陽町の猟友会では、猟師のほとんどが60歳以上の高齢者であり、猟友会の人数も減少傾向にある。集団猟の参加メンバーが減り、メンバーの高齢化が進んでいるため、人がイヌを追いかける力が弱まっている。このため、イヌが獲物を噛んで動きを止めておく力も重要になってきている。「止め(咬み)」は、獲物を噛むことで動きを封じる行動を指す。ただし、ただ単に噛みつきに行けばいいという訳ではない。噛みつきに行くと獲物に撥ねられてしまえばイヌは受傷し獲物を取り逃がしてしまう。それは猟師にとってもイヌの治療費で大きな痛手となるため、追い鳴きし、イヌが獲物に集まってから噛むなど、噛むタイミングや場所等が重要となる。巻き狩りにおける人とイヌの構成に関してはまちまちだが、人間5~6人に対しイヌが2~3匹の場合や、人間10人以上に対しイヌが6~7匹などの場合がある。

この猟法における人間とイヌの関係については、人間が犬を「道具」として利用するのだが、猟犬が山中を自由に搜索し、人間の方が猟犬の居場所を追いかけるという点にある。その光景は、あたかも「人がイヌに使われている」ようにも見える。海陽町の犬猟についての上記の見方を示してくれたのは、岐阜で単独猟を行う猟師で、彼女の使う猟犬は、人差し指を左に向けるだけで左に行くというように、猟師の指示のもとでしか動かない。この岐阜の単独猟のスタイルと、海陽町の集団猟は、手法は違うものの双方が人とイヌによる「狩猟」として成り立ち、何十年もの間受け継がれている。この一見すると、「人がイヌに使われている」ようにも見える海陽町の犬猟は、どのようにして成り立っているのだろうか。次章ではエスノメソドロジーの手法をもとに実猟の場面における人とイヌの相互行為における特徴を分析する。

第3章 犬猟の場における相互行為

第1節 犬猟のエスノメソドロジー

本章では、犬猟の様子を撮影したビデオデータのエスノメソドロジカルな分析をもとに、人とイヌの相互行為を検討する。

今回は当日、勢子がイヌを連れて山へ入るところから勢子に同行した。勢子は優美さん(Y)と筆者(S)の二人、待子は乃一会長(N)他、親族の方(たけしさんはTで、他の方は声で判別できなかったため“?”としている。)合計五人で、イヌは乃一会長の飼いイヌであるメスの姉妹3匹(茶々、初、江)であった。それぞれ持ち場につくと勢子はイヌを連れて山へ登り、イヌを放した。それ以後はGPSや無線機を利用しイヌの位置を確認し連絡を取り合っていた。しばらくするとイヌが鳴いたので優美さんがGPSで確認し乃一会長が待子を移動させるが、優美さんが地図を読み間違えてしまい、イヌが鳴いた場所へ行くことができず、取り逃がしてしまった。その後はイヌを回収し終わったところで終了した。猟は2015年6月13日に行われイヌを鎖から離してからイヌ回収までに39分2秒かかっている。この分析では、犬猟の場における相互行為を見るために、イヌや人の視線、リードなどの道具、人の介入行動等に注目し、人やイヌが場面場面どこに志向を向けているのか、道具がどう機能しているのか、どの程度、どんな種類の介入行動を人はおこなっているのかについての分析をおこなう。

表記についてだが、人とイヌの区別を分かりやすくするため、人はローマ字で、イヌは日本語で表している。また、複数のイヌの行動を表す時には“犬”としている。猟師の、猟犬に対する介入行動に関しては蹴る((1秒))のように、枠で囲っており二重括弧内にその行為にかかった時間を1秒単位で計り、記入している。無線での会話は「はいはい。」のように文字に網掛けをしている。

1. 人とイヌの「行為のもつれ」

以下は、軽トラックの荷台に繋がれているイヌを下ろし、山へ連れていく際の人とイヌの行為である。

- 0:39 Y: ((茶々に近づきリードをほどく))
茶: ((その場でくるくる回りながら動く))
- 0:49 Y: ((Sにリードを渡す))
茶: ((トラックから降りる))
- 0:50 Y: はい、じゃあ[持ってくれます?]
S: ((リードを受け取り)) [あ、はい。]
- 0:54 S: ((茶々に引っ張られ)) おおお～。
茶: ((動き回る))
- 0:59 S: ((茶々に引っ張られ)) おおお～。
茶: ((動き回る))
Y: ((江のひもを外す))

江：((トラックから身を乗り出す))

1:05 江：((ひもが外されるとすぐに自らトラックを降りるようとする))

1:06 Y：((江のひもを引っ張り ((12 秒))、初のひもをほどく))

1:10 Y：((しっかりひもを持ち直し二匹をトラックから下す))

1:12 イヌ：((初、江がトラックから降りる))

1:15 Y：((山に入る))

S：((Yの後ろをついていく))

以下イヌの視線に関してはほとんどが前方を見ているため、特に違う方向や（飼い主を見るなど）飼い主の介入に対する反応などに限定して記述する。

1:17 茶：((Yよりも前に出る))

1:18 Y：((前に出るとひもが絡まるので茶々を蹴る ((1 秒)))

1:20 Y：((初、江を引っ張り ((5 秒))進む))

1:24 初：((Yより前に出る))

1:27 Y：((初より前に出る))

茶：((先頭に出る))

1:28 S：あれ？つなが hhh

Y：((後ろに振り返る))

1:30 Y：いけます？

S： はい。

1:31 茶：((どンドン先に進もうとする))

1:32 Y：((初、江にYより前に行かせる))

1:38 Y：よいっしょ。

1:43 Y：((立ち止まり、ひもの持ち方を調整))

S：((Yに続いて立ち止まる))

犬：((茶々は引っ張り前に進もうとする))

1:44 Y：茶々待ってよお。 ((2 秒))

前方

茶：((声に特に反応を示さない))

1:52 Y：((歩き出す))

S：((続けて歩き出す))

1:56 茶：((立ち止まる))

2:02 S：((茶々を見てリードを引っ張る)) 茶々～。

2:04 S：((茶々と目が合う))

茶：((Sを見て、歩き出す))

2:06 S：((茶々に向かって)) はい！

2:09 茶：((再び立ち止まる))

S：あれ？

2:10 茶：((前方にダッシュする))

2:12 S：((軽く躓き)) いたっ。

2:16 茶：((歩く))

Y : ((無線機で連絡を取っている))

2:33 S : よいしょっ。

しばらくイヌに引っ張ってもらおう形で山を登っていく。



図 3-1 犬を連れて山へ登る

この場面では筆者とイヌとの関係と、飼い主とイヌとの関係の違いが目立った。筆者は勢子として猟に参加するのは初めてで、山へ連れていく際にもかなり苦戦した。1分56秒～2分12秒の筆者と茶々のやりとりにおいては、茶々には筆者を引っ張って歩いてほしいという筆者の思いとは裏腹に、1分56秒に茶々が急に止まり、筆者は困惑する。2分2秒に「茶々～」と呼びかけをし、2分4秒に目が合い、ようやく歩き出したかに見えたが、2分9秒に茶々がふと止まり、あれっと思っている間に茶々がダッシュをし、2分12秒には茶々に引っ張られ、軽く躓いてしまった。ここでの筆者は、イヌの行動が予想できない状態であった。イヌの方からしてもいつもの猟師とのリードの引っ張られる感覚の違いや、猟に慣れない筆者へのとまどいなど予想できない部分があっただろう。このとき筆者とイヌの間には相互予想が成り立っておらず、筆者の「イヌが筆者を引っ張ってほしい」という思いは一方的なものに過ぎず、すれちがいが表面化している。

一方で猟師とイヌとは、介入行為を行いながらも筆者の時のような急にイヌが動きを止めたり、ダッシュしたりといったことはなく、スムーズに進んでいることが分かる。1分18秒の時点では、筆者がリードを持つ茶々が優美さんよりも前に出ており、優美さんがリードを持つ江が優美さんの前に、初が優美さんの後ろにいたため、3匹のリードが絡まる危険があった。そこで優美さんが茶々を蹴り、「前が出るな」というメッセージを発した。さらに、初、江のリードを引っ張ることで2匹を前に行くように促し、この危険を回避している。図3-1は回避した直後の写真である。このように直接的にイヌに働きかけることでイヌと人がその後リードを絡ませることなく進むことを可能にしている。

また、39秒から1分12秒の間、優美さんにより一匹ずつイヌがトラックにつながれていたひもを外される場面では、ひもを優美さんが外している、あるいは外されることが分かると、30秒に見られる初の立ち上がり優美さんに近づく様子や、39秒に見られる茶々がその場をくるくると回り落ち着かない様子、59秒に見られる江のトラックから身を乗り出す行為から、「猟に行くことへの期待」が読み取れ、猟の主体的な参加者として捉えることができる。そして、優美さんによりひもを外され、猟専用のリードをつけられると3匹とも当然のようにトラックから下りている。これは優美さんのひもを外す行為が次にトラックを降りて山に登るのだという流れを示唆し、これを読み取ったイヌが「あたりまえ」の、あるいは「いつもの」流れとして行ったのだといえる。

以上のことから、この場面は確立された流れのある場面であるといえる。そうであるために、優美さんがひもを外し猟用のリードをつけると、「あたりまえ」のようにトラックから下りる。そして、イヌは人を引っ張って山に登る。しかし、ここでは猟に初めて参加する筆者によって、いつもの流れは少し崩れてしまう。筆者がイヌとうまく連携がとれず、イヌが前に行きすぎ、他のイヌのリードと絡まる危険性が発生した。しかし、こうした場合でも優美さんが介入を行うことで軌道修正し、その後はスムーズに上ることができている。この場面は、日々の猟の繰り返しから、イヌとのある程度規則性のある「行為のもつれ」としての相互行為が見られる猟師と、それが無い筆者との差異が表面化している。

2. 搜索開始の合図

ここではイヌについているリードを外し、自由に搜索をおこなわせる場面を分析している。

4:40 Y: あ、そこでストップで。()

S: あ、 はい。

4:42 茶: ((その場を動き回る))

4:45 Y: ((江のひもを首の鎖から外す))

4:50 Y: おいき。(1秒)

江: ((走り出す))

4:51 Y: ((初のひもを首の鎖から外す))

4:55 S: これ離していいんですか?

初: ((走り出す))

4:56 Y: はい
S: はい。
4:57 Y: 茶々いっちゃん最後でいいんで。
5:00 S: ((茶々のひもを首の鎖から外しながら)) え、もういい[ですか?]
Y: [(いっていいよ。)
5:01 茶: ((走り出す))
5:07 Y: 放したよー、そっちの方行きよる。
5:14 N: はいはい。
5:18 N: もう、みんな放したんやろ?
5:22 Y: みんな放したー。
5:23 N: はい、了解。
5:25 Y: ((Sに向かって)) 私らも上で。
5:26 S: はい。
5:27 Y: ((歩き出す。))
S: ((Yに続いて歩き出す))

以下、山中を歩きながらの会話であり、YはGPSで位置確認しながら進んでいる



図 3-2 リードを外され走り出す茶々
(矢印は志向の方向を指す)

この場面は筆者にとって印象的な一つの場面であった。4分45秒に江のリードを首の鎖から外し、50秒には猟師の方を一切見ることなく搜索に走り出す(図3-2)。これは初も茶々も同様であった。猟師も50秒に「おいき」と声をかけた後、イヌが搜索に行ったことを確認してから待子に報告を行っている。この場面におけるイヌの視線は山を登るとき、リードを外されるとき、走り出すときのすべてにおいて、一貫して前方に向けられている。検証は出来ないが、イヌにとっては山を登るときからすでに「搜索」が始まっているのかもしれない。猟師によれば、トラックに載せているときからイヌがそわそわし始めることは、「獲物のにおいをすでにキャッチしている」ことを示すため、山に登る前に「搜索」に行かせることもあるという。

このように、イヌにとっては任意の段階で「搜索」が始まっている可能性があるが、それはあくまで志向を前方に合わせ嗅覚に集中するにとどまり、猟師を無視したり、リードを引っ張って無理やり前方に行こうとしたりはしない。しかし、ひとたびリードを外されると、それが「合図」であるかのように走り出す。すなわち、人間がリードを外すという行為は、獲物を探しに走れということの意味している。そしてイヌは、人間の介入に対して、「走り出す」という応答をおこなっている。猟師にとっては、リードを外すことをきっかけにイヌが走ることを見守っているだけであることから、人がリードを外す-イヌが走り出すという行為の連鎖が「いつものこと」であることがわかる。

3. イヌからの働きかけ

ここでは放したイヌがYのもとまで戻ってくる様子を分析している。

8:28 Y: ((無線機でイヌにつけた無線が入るかどうかが確認しながら進む))

8:54 N: () あとあるけえ?

8:57 Y: 上の方はほとんどない。

8:58 Y: ((歩き出す))

9:09 Y: イヌも鳴かん。

9:24 S: 結構おったらすぐ鳴くもんなんですか?

9:26 Y: はい、

S: ああ～。

Y: ((右斜め前を見て)) あ、帰ってきたか。

10:26 Y: ((無線機に向かって)) 今ゆず畑にきたけんほっちのほうに行くー。

10:31 N: はいはい。あの、(みぎのはなの見えるで)?

10:36 Y: ((立ち止まる))

10:38 Y: え、みぎのはなのほうに行くん?

10:41 S: あら。

N: (いや奥いくんでな。)

犬: ((初、茶々の順に走ってくる))

10:44 Y: 先右の方行ってくるん?

- 10:48 N : ()
- 10:51 Y : はいはあい。() 行って来る。
 犬 : ((初と茶々が Y の近くで止まる))
- 10:53 Y : ((歩き出す))
 犬 : ((茶々、初は Y の後ろをついていく))
- 10:58 Y : はい、おいで。((1秒))
- 10:59 茶 : ((Y を見て歩き出す))
- 11:07 犬 : ((少し前を歩き、Y を時々見て Y が来るまで待ってからまた進む))
- 11:16 ここまでに江も合流している
- 11:38 S : 勝手に戻ってくるんですね。
- 11:41 Y : おらんかったらね。
- 11:42 S : へえ～。

以後しばらく下り、少しずつイヌとの距離が離れ見えなくなる



図 3-3 寄り添うイヌ

この場面ではイヌが自分で飼い主の元まで戻り、しばらく一緒に歩きながら「こっちの方はいなかったから、あっちの方もう少し見てくるわ」とでも伝えるかのように自分でもう一度捜索に出かけている。このとき注目すべきなのは 10 分 51 秒～11 分 7 秒のイヌの行動である。ここでは初と茶々が戻ってきているが、2 匹は戻ってくると 10 分 51 秒には、いちど両方とも優美さんの近くで止まり、10 分 53 秒に優美さんが歩き出すと後ろについて歩きだしている(図 3-3)。ここでイヌは常に人の方に視線を合わせているわけではないが、周辺野に人が入る位置につけており、歩き出す際には優美さんを見て歩き出したことを確認しながら歩き出している。こうした行動に関して特に人の指示はなく、戻ってきたこと

に対し、褒める、叱るなどの行為もなく、「はい、おいで」と呼びかける以外にほとんど関心に向けていない。

そして、ここからイヌと人の間に少しずつ距離ができる。11分7秒のイヌの優美さんよりも少し前を歩き、優美さんが来るまで待ってからまた進むという行為は、その後何回か繰り返され、そのたびに距離が開き、ついには見えなくなってしまう。ここではイヌは優美さんに視線をあわせていた。その後、11分38秒から11分42秒の筆者と優美さんとの会話からわかるように、イヌは獲物が見つからなかったため優美さんの元まで戻っている。そして、獲物が見つからなかったがまだ捜索をした方がよいのか、それとも終了するのかについて優美さんが「指示をしない」行動は、イヌにとっては「捜索を続ける」というメッセージであった可能性がある。ここでもし、優美さんがリードをつけ始めれば、それは「猟の終了」の合図であるといえよう。すなわち、イヌが人に何らかの働きかけをおこない、それに対する人の反応を見て次の行動をおこなうという、イヌからの働きかけにもとづく人とイヌの相互行為の特徴が見てとれる。

4. 獲物の発見の合図

ここでは山中をあるきながら優美さんがしていた無線機でのやり取りに注目する。

13:52 イヌ：((遠くで鳴く、1分34秒程度聞こえ、以後は無線が入らなくなるため不明))

13:55 Y：父さん鳴いたよー。

13:56 S：あ、

14:01 Y：((立ち止まり、イヌがいる下の方を見る))

14:10 Y：今国道側の方いきよー。

14:17 N：鳴かんのやろ？

14:19 Y：鳴いた鳴いたー。

このあたりからイヌの声が遠ざかり無線機からのみ確認できるようになる

14:21 N：了解。

14:22 N：(あれけえゆうとけよ、) なんちゃ()。

14:26 N：()

14:30 ?：了解。

14:51 Y：() 戻ってますか。((歩き出す))

14:52 S：はあい。

イヌの無線が入る場所を探しながら歩く

15:31 Y：お父さん、前にある家の(門の)方にいきよー。

15:38 N：(ええ、どうした?)

15:39 Y：今国道沿いのあの(ばんぶ)のところに家あるとこに(いけん。)

15:45 N：はいはい。

15:49 ?：(どないしていくん。)

15:52 Y：() 無線がもう入らんようになるけど鳴っきよー。

16:05 ?：() ?)

- 16:08 Y: 3匹ともいっとる一。
16:11 N: どちらの方、お父さんの方行きよん？
16:14 Y: 反対国道の方。

しばらく無線による会話が続く

- 17:32 N: 川原の方出たんけえ？
17:35 Y: ((GPS 見ながら)) 川原の方に出て、たぶんもうすぐ橋の方につくと思う。
17:42 Y: ((歩き出す))
17:43 N: え、橋？ゆうたら () ？
17:47 Y: n もう一つ下の橋。
17:52 N: した、いgいg
17:57 Y: () の橋？吉野の橋？
18:05 N: え～、お、おい。
18:08 N: 吉野の橋の方行くん？
18:14 ? : ()、了解や。
18:18 Y: えーっと、私らは、じゃああ、(外へ出ようか)。
18:32 Y: もう GPS が切れたやあ。
18:35 N: ええ？
18:36 Y: 吉野の橋あたりで GPS が切れた。
18:39 N: はいはい、あー、たけし、いよ吉野の橋へ回れ。
18:45 T: はい了解。



図 3-4 無線機で会話をする Y さん (優美さん)

この場面では、勢子と待子のやりとりが中心である。13分52秒以降1分34秒間もの間、複数のイヌが鳴いている。このとき注目すべきなのは、イヌの鳴き声を獲物の発見の合図であると断定している点である。会話の中に「獲物がいた」というような直接的な断定を示す箇所はないが、18分39秒の会話で、乃一会長がたけしさんに待機場所の移動を命じている点から、イヌが獲物を追っていることを前提に、イヌの近くへたけしさんを移動させ、獲物を捕獲しようという意図が読み取れる。また、会話のしばらく後に「逃がしたかも」と優美さんが言っている。これはイヌが獲物を追っているという想定に基づき、だが獲物を逃がしてしまったかもしれないという推測である。イヌが鳴く行為は、獲物以外に対しても多く見られる。たとえば筆者も初めて乃一会長の犬小屋を訪れた際は激しく吠えられた。また、乃一会長が飼っているイヌの次郎は、トラックの荷台の乗っているとき、トンネルの中を通ると怖がって鳴くのだという。このように、普段から全く鳴かないというわけではないのに、なぜこの場面において「獲物の発見の合図」とであると断定ができるのだろうか。理由の一つとして、鳴く行為が獲物の発見を示す確率が高いことがあげられる。確かに、この日の猟では、この場面以外イヌは一切鳴いていなかった。また、激しく長く鳴いているという、鳴き方の特徴も「獲物を追いかけている」のではないかということを示唆する。しかし、これだけでは他の理由による「鳴き」だという確率を取り除くことは出来ない。理由のもう一つには、複数回の猟の経験からなる信頼があるのではないだろうか。犬今回の犬猟に参加した茶々ら3匹は、すでに2年間と半年の経験がある。特にこの姉妹は獲物をしぶとく追いかけるため、最近は毎回猟には連れて行くという。すなわち、過去の同様のケースにおけるイヌの行為の規則性から、人々はイヌの鳴き声を「獲物の発見の合図」だと「断定」しているのだと考えられる。

ここではイヌと人が互いに見えない状況であっても、鳴き声によって人に働きかけ、人が行動を変化させるという、相互行為が成立していることがわかる。こうした相互行為を成り立たせているのは、過去の犬猟におけるイヌの行為の規則性であると考えられる。

5. 猟の終了の合図 I →これは、前の事例（リード云々の）の次にもってきても良い。ここでは、イヌが戻ってくる様子を分析する。

30:09 Y: 茶々！ ((1秒))

茶: ((Yのもとまで戻ってくる))

30:11 Y: 父さん茶々が優らのとこ帰ってきたー。

茶: ((Yの近くをうろつき時々Yを見る))

30:15 N: ()。

30:28 Y: もっと車停めとーとこの下流の方。

30:34 Y: 、と思う。

30:38 Y: ((茶々の首の鎖に紐をつなぐ))

? : () てこんかったん

30:41 N: あ、ほんま。

30:46 Y: ((茶々を連れて歩き始める))

茶：((Yの斜め後ろをついて歩く))

...

33:18 Y：((歩き出す))

Y

茶：((続いて歩き出す))

33:20 N：おまえや全然まちごうてしもとるやんけえ。

33:22 Y：はいはい、だって細いんがこれ川かと思ったらちゃうかった。

33:29 N：ほなやっぱ川原の方出てたンちゃん。

33:33 Y：ちゃうちゃう。あーつとお、

33:35 Y：((立ち止まり、GPSを確認))

茶：((続いて止まる))

33:39 Y：父さんこっちの下の方のイヌかいようところがうるさいけんそっちの方に江とか初がおると思う。

33:47 N：あ～、ほんならやっぱ()方に出て行ったんやな？

Y：((歩き出す))

茶：((続いて歩き出す))

しばらく山を下る



図 3-5 リードをつけた茶々と山を下る Y さん (優美さん)

この場面では、優美さんが GPS の地図を上下さかさまに読み間違えていたことが判明し、正しいイヌの位置の把握のため無線で待子とやり取りしている。そして、茶々一匹が優美さんのもとに戻り、リードをつけられた後、優美さんが初や江の居場所を推測しながら山を下る場面である (図 3-5)。この場面では先述した場面 2 と 3 との比較をもとに分析していく。茶々は再び自分で戻ってくる。これは 3 の場面と同様獲物が見つからなかったことを示している。そして優美さんの近くで待機し、時折視線を優美さんに向け、様子をうかがうようなしぐさが見られる。ここまでは 3 の場面と同じである。しかし今度は、優美さんが茶々にリードをつける。この行為により、イヌは「猟の終了」を察知し、搜索行為を終了したと考えられる。搜索を行っていないとしたのは、リードを外す 2 の場面では常に志向が前方 (山) に向けられていたのに対し、33 分 18 秒の視線や、33 分 35 秒の優美さんに続いて立ち止まる際に、志向を優美さんに向けているからである。

6. 猟の終了の合図 II

ここでは犬笛や呼びかけを使い、猟が終了したことをイヌたちに伝え、戻ってくるよう指示する様子を分析する。

- 36:40 Y: 父さん 419 なんかイヌの声が入りよると思うんやけど茶々がおってかぶって聞こえん。
- 36:48 N: えー、(それかあっち行って車で、)
- 36:52 Y: 今ほっち下りていきょうもうすぐ着くー。
- 37:07 Y: ((犬笛 2 秒))
- 37:25 Y: ((犬笛 2 秒))
- 38:20 Y: ((山を下り道に出る))
- 38:26 Y: おいで、茶々 ((2 秒))
(茶々をトラックの荷台に乗せる))
- 38:28 江: ((走って戻ってくる))
S: あ、いますね。
- 38:34 Y: 江〜! ((1 秒))
初: ((江に続いて走ってくる))
- 38:36 Y: おいで、初〜! ((2 秒))
- 38:38 Y: は〜っ〜! ((2 秒))
- 38:40 Y: はこいこいこいこい! ((3 秒))
- 38:44 Y: ((犬笛 1 秒))
- 38:46 Y: ((犬笛 短く 2 回、計 1 秒))
- 38:47 江: ((自分でトラックの荷台に飛び乗る))
Y: は〜っ〜! ((2 秒))
- 38:49 江: ((確認できないが Y を囓んだ?))
- 38:50 Y: いてて。

38:51 Y : ((頭を軽くたたき、首の鎖にひもをつける))

S : huhuhuhu

39:02 初 : ((自分でトラックの荷台に飛び乗る))



図3-6 トラックの荷台に飛び乗る江

この場面では、茶々を連れ、山を下りながら初や江に帰ってくるよう指示を出している。この会話の前に優美さんは初と江の無線がどこで入るかをチェックし、近くまで来ていることがわかっている。36分40秒の優美さんの会話でも419とは無線の番号であり、イヌの居場所を確認していることが分かる。そのあと犬笛を吹いている。さらにイヌの姿が見えた38分28秒以後は呼びかけも多く行っており、その声は今までの呼びかけとは違い大きく、声を張り上げていた。これはイヌに「戻ってくるように」という指示である。この行為が意味をなすためには、同じ刺激に対して人とイヌとの間に共通した認識がなければならぬ。ここではイヌは江も初も志向を人に向け、まっすぐ走ってトラックに飛び乗った。この飛び乗る行為からも、人の元に戻る→トラックに乗るという確立された流れが存在することが示唆される。

このように、犬猟においては、犬笛を吹く行為、大きな声での呼びかけ、イヌのリードを外すといった特定の人の行為がイヌにとって猟の開始や終了を示唆する情報となっている。

第2節 小括

イヌにとって、犬猟の開始はトラックに乗って移動しているときから始まっているのかもしれない。トラックに乗っているうちに獲物のにおいをかぎつけるとイヌは落ち着きをなくすという。そうした場合、イヌの志向は山の方に向けられており、獲物のにおいをさがしていたと思われる。しかし、イヌはそのまますぐ山に走ろうとしたりはしない。これは、行動開始の合図がまだ出されていないからだ。この合図は「リードを外す」という行為であると考えられる。イヌはリードを外されることを機に、自由に搜索を行う。

しかし、獲物が見つからない場合は、一度猟師の元へ戻ってくる。このときイヌは猟師に志向を合わせ、猟師の「指示をしない」という行為からまだ猟の終了の合図が出ていないと判断し、再び搜索に戻っていた。また、4の場面でイヌが鳴く行為は、待子が待機場所を移動するという人の行動変化を引き起こしている。ここには「鳴く」ということが、獲物の発見の合図であるという前提がある。そして、6と7の場面では「リードをつける」、「犬笛」、「呼びかけ」これらの行為が今度は猟の終了の合図としての機能を果たしている。猟が終了すると、最初は常に山へ志向を向けていたのはうってかわって、人に視線を向け、人のペースに合わせて歩くといったように、人に志向を向けている。これらの合図としての行動が、次の行動を示唆し、犬猟を成り立たせているのである。

しかし、これらの行為が「合図」として成り立つためには、それが合図であるという共通の認識がなければならない。乃一会長らは事例に登場するイヌとの猟だけでも何十回という経験があり、それを踏まえたイヌの行動の規則性を理解している。そのため、山でイヌが「鳴く」行為に関して、獲物以外のものに反応しているという事態は考慮せず、行動に移している。

これは、場面1における筆者とイヌの関係と比較するとわかりやすい。筆者は、イヌと山を登る際、イヌが筆者を引っ張って進んでほしいという筆者の気持ちとは裏腹に、イヌは急に立ち止まったり、かと思えば急にダッシュしたりとイヌの行動を予期できない状況にあった。ここでは筆者のリードを引っ張る、あるいは呼びかけといった行為が、イヌには「前に進め」という合図として認識されていない。この違いが、初めて犬を連れて山に入った筆者と何十年と猟をしている猟師との差なのである。

もう一つのこの猟の特徴として、人が直接的に介入を行う介入行動が非常に少ない点がある。この分析により確認できた介入は声（名前を呼ぶ、こいこいなどの呼びかけ）、叩く、蹴る、犬笛、リードを引っ張るといった行為であり、それぞれ声11回（18秒）、叩く1回（1秒）、蹴る1回（1秒）、犬笛5回（6秒）、リードを引っ張る3回（17秒）の合計21回（43秒）であった。（この計算は1秒単位で数えており、1秒未満のものは1秒と見なし計算している。）これは全体の撮影時間39分のうちのものであり、わずか1.8%であるといえる。目線カメラで撮影を行っているため、映っていない部分があると考慮しても非常にわずかであるという点では変わらないと考えられる。

この点に関して太田[1995]は、東アフリカの牧畜民トゥルカナの牧童によるヤギ群の統率がいかんに行われているのかを調べるために、牧童の一日の統率行動を記録し、放牧時間と統率行動の時間を比較した。統率行動としては、木製の杖を携行し、それを用いて振り回す、投げるなどの行為や、声、両手を振りかざすなどいくつかパターンが見られた。しかし、「放任期間」に相当する時間帯において、ヤギ群に対して牧童が統率行動をとった

時間はわずか 1.28%であり、統率行動をとっている時間のほうが、ヤギの自律的な移動にまかせる時間よりも圧倒的に少ないことを明らかにした [太田 1995]。

このように、人が家畜を管理する際、介入行動が非常に少ないにもかかわらず、「管理」が成り立っている事例が存在する。トウルカナでは、ヤギは「自律的にまとまりあう」という習性や、「親和性の強い母子関係」といったヤギの生物学的特性を人間が見抜き、利用したことが介入行動の少なさにつながっている。では、犬獺に関する介入行動の少なさはどのように理解すれば良いのだろうか。次章では、獺犬を育成するために行われている「訓練」に注目し、そこで人がイヌの何を訓練しているのか、そこでの人とイヌの関係はどのようなものなのかを明らかにする。

第4章 訓練

第1節 猟犬育成における訓練概要

前章で検討したように、犬猟は人とイヌの双方による、相手の行為に対する所定の反応の連鎖によって成立していた。こうした相互行為を成立させるためには、筆者がイヌとの相互行為を円滑に進めることが出来なかったように、訓練が必要である。それはイヌの方も同様であり、イヌを所有する猟師は、猟犬を育成するために、イヌの「訓練」をおこなっている。海陽町の猟師は「訓練よりもブリーディングのほうが重要である」と語る。だが、イヌに対する介入行動が極めて少なくとも「猟」が成立する状態を生み出すためには、「訓練」が欠かせない。実際、ほとんどの猟師が訓練、またはそれに類似したものを行っている。一般的にイヌの訓練というと、警察犬や盲導犬をイメージするのではないだろうか。例えば警察犬であれば、持来欲訓練や、服従訓練、足跡追求訓練、臭気選別訓練など人の指示通りに働くイヌを1年半かけて徹底的にしつけられ、上級検定試験に合格したイヌのみが晴れて現場で活躍することができる〔警視庁 HP〕。盲導犬も同様に、1年近くの期間をかけて服従訓練や歩行訓練といった基本訓練をおこなう。そして、基本訓練を応用し、使用者をきちんと目的地まで届ける誘導訓練が行われる。さらに3回にもわたる評価試験をクリアし、目の不自由な方との共同訓練を終えてようやく盲導犬になれる〔日本盲導犬協会 HP〕。も警察犬や盲導犬の場合、イヌは人間にとっての完璧な「道具」となる能力を身に付けてようやくその資格を得る。そうでなければ犯人を捕まえることは出来ないし、目の見えない人にとって自分の目の代わりとして安心できないからだ。ここでは高度な道具性が求められており、もし同じ機能を果たす機械が存在すれば代替可能であるとも考えられる。

では、猟犬の訓練はどのようなものなのか。猟犬の訓練は基本的に柵に囲まれた訓練場において行われる。先にイノシシを放しておき、後に猟犬を柵内に放す。イヌはイノシシを捜索し、発見次第鳴き、追いかけて、噛みつき抑えることができれば理想的な流れとなる。流れに関してはほとんど実猟と変わりはない。実猟であればイノシシを抑えられたら「止めさし」を行うのだが、訓練ではイノシシのにおいや味を覚えさせるといった目的で長い時間、あるいはイノシシが死ぬまでイヌに噛ませる猟師もいる。海陽町にはイノシシが多いし、シカに比べてイノシシの方が狩猟対象として好まれているため、イノシシを用いた訓練が行われる。乃一会長らは犬猟と並行して罾猟も行っており、罾猟で仕留めたイノシシを訓練用のイノシシとして活用する。そのため、訓練の頻度は罾猟におけるイノシシの捕獲数と相関している。また、訓練回数はイヌによっても異なる。基本的に1匹ずつの訓練は行われない。かならず兄弟姉妹や、同じ年代のイヌのグループごとに行われるが、幼少期の訓練では親犬などが手本として投入されることもある。犬猟における「訓練」は、警察犬の訓練や盲導犬の訓練などとは何がどのように異なるのだろうか。

本章では、訓練場面の映像データをエスノメソドロジカルに分析し、イヌの訓練方法やそこでの人とイヌとの相互行為に注目しながら、そこでいかなる「訓練」がされているのか検討する。

第2節 事例検証—初期訓練と後期訓練との比較

以下の場面1のデータは、2010年11月3日に行われた訓練映像をイノシシ・イヌ・人のそれぞれの行動をまとめたものである。訓練対象は2010年に生まれたカイ、リク、テンの兄弟と、同じく2010年に生まれた神で、途中登場するダイヤはカイらの母イヌでお手本として投入される。この訓練対象のイヌたちは訓練を始めてからまだ日が浅いため、こうした訓練を初期訓練とする。この映像は乃一会長の娘さんである智恵さんの撮影によるもので、連続撮影ではなく細かくカットが別れているためこの訓練全体の時間はわかっていないが、全撮影時間は24分8秒となっている。訓練場には乃一会長、智恵さん、優美さんがいる。

この訓練の流れとしては、乃一会長が個人で所有している柵に囲まれたかなり狭い訓練所において行われる。あらかじめイノシシが柵内に放たれた状態で、初めに点・陸・海が放される。点・陸・海は鳴きながら追いかけるもののがかなり恐る恐るであり、イノシシが少し動くと思ってしまう。続いて神を投入するもの神もなかなか噛みつきに行くことが出来ない。そこで乃一会長は母イヌであるダイヤを、鎖をつないだまま投入する。ダイヤが噛みつくと子犬たちも噛みつき、噛みついたところで会長がダイヤをイノシシから離す。イノシシが弱り、子犬が噛み続けられるようになると後はイノシシが死ぬまで噛ませ続ける。

この章でも3章と同様、人に関してはイニシャルで、動物に関しては漢字、あるいはカタカナで表記している。

1. イノシシを怖がる子犬（初期訓練）

T：智恵さん Y：優美さん

0:51 猪：((角に逃げる))

点：((イノシシをじっと見る))

陸：ワンワン！((一歩引く))

0:52 猪：((フェンスを登ろうとする))

海：ワン！

陸： ワン！

点：((一歩引く))

0:53 猪：((海に向かって走る))

陸：((後ろにジャンプする))

点：((後ずさりする))

0:54 陸：((逃げながら))ワン、ワンワン！

猪：((海に体当たりする))

海：ワン！ワワン！((はねられ逃げる))

0:55 猪：((右に方向転換し岩に上る))

海：ワン、ワン！((逃げる))

点：((追いかける))

陸：ワン、ワンワン。((追いかける))

- T : 行け行けいけ行けいけ行け！
- 0:56 猪 : ((フェンスをくぐろうとする))
点 : ((岩の下で止まる))
陸 : ワンワン、ワン！ ((岩の下で止まる))
- 0:57 点 : ((一歩前が出る))
陸 : ワン、ワン！ ((一歩前が出る))



図 4-1 怖がりながらもイノシシに近寄る子犬

この場面は、まだイノシシに慣れていない子犬たちが、イノシシを怖がりなかなか立ち向かっていけない場面である。図 4-1 のように 51 秒時点では、イノシシを過度に追い詰めているものの 52 秒にイノシシがフェンスを登ろうと少し動いただけで点は一歩引いているなど、かなり腰が引けている。鳴きに関しても弱く、イノシシに対し「威嚇」を示すことができない。このように、この場面では一見イヌが攻めているように見えるが、イノシシは全く気にする様子もない。その証拠に、次の 53 秒でイノシシが海に向かって走ると、陸は後ろにジャンプし、点は後ずさり、逃げ遅れた海が 54 秒にはイノシシにより体当たりされてしまう。本来猟ではイヌが攻め、イノシシが攻められるという関係性となるはずだが、ここではイノシシが攻め、イヌが攻められるという関係ができてしまっている。さらにイノシシにはねられた後カイは、映像にはおよそ 9 分 8 秒登場しない。これははねられ、イノシシへの恐怖から近づくことが出来ないからだという。

このとき人は 55 秒の「行け行けいけ行けいけ行け！」という呼びかけを除いてほとんど関与しておらず、見守っている。これは子犬たちがどれだけできるのかを見ているのだという。

2. 集中力に欠ける子犬（初期訓練）

続いての事例は 2015 年 9 月 5 日に行われた訓練である。訓練対象は 2015 年に生まれた太郎（オス）、次郎（オス）、黒（メス）の兄妹である。訓練場所は乃一会長が所有する柵に囲まれた運動場である。今回は子犬が訓練が 2 回目であり、この訓練も初期訓練であると言える。前回子犬 3 匹でイノシシの捕獲に成功したことから、一匹ずつ投入した。クロ・太郎・次郎の順に投入するが智恵さんや優美さんの近くにいたり、捜索に行ってもすぐあきらめて入り口付近にいたので、優美さんが自宅から帝とカツを連れてくる。まず捜索ができる帝を投入するが、癌により調子が悪く走れず捜索できない。次にカツを入れるが噛み犬のためなかなか捜索できない。しばらく経つと太郎を見つけ「ワン！」と吠えるとそれを合図にイヌが集まり噛むことに成功した。成功するとカツ、帝はイノシシから離し、子犬だけで噛ませ、最後にともさんがとどめを刺した。時間は 1 時間ほどかかり、最長記録だと話していた。

次：次郎 S：筆者（佐藤）

10:33 次：((S を見つけ駆け寄る))

10:35 次：((歩いて S に近づく))

10:37 次：((S を見ながら止まる))

S：よっ。

10:38 次：((S に一歩近づく))

10:39 S：はい、行け。Huh,huh.

10:41 次：((口を開けて更に一歩近づく))

10:43 次：((きょろきょろ左右を見る))

10:45 次：((振り返り走って捜索に戻る))



図 4-3 猟に集中できず筆者に近寄ってきた次郎

この場面では、子犬たちが搜索をするものの、一向にイノシシを見つけることが出来ず、集中力が切れて、次郎が筆者のもとに近づいてくる場面である。本来であれば、人を意識せずイノシシの搜索に集中することが求められるが、面白くないのか 10 分 33 秒に筆者の方に駆け寄り、10 分 45 秒までの 15 秒間もの間筆者に志向を向けていた。図 4-3 からわかるように視線は筆者をしっかりと捉えている。41 秒の口をあけて更に一步近づいたのは、まるで「遊んで」とお願いするような態度であり、猟に集中どころか興味を示していないようにも見える。

3. 間接的介入（初期訓練）

この訓練は、1 の場面の続きである。乃一会長が、母イヌであるダイヤを、鎖をつないだまま投入した直後の映像となる。この場面では、ダイヤがイノシシを戦略的に攻め、噛みつきに成功し、それを見た子犬が真似するという犬同士の学習が見られる場面でもある。

N：乃一会長　ダ：ダイヤ　T：智恵さん

7:16　ダ：((岩の上に顔をだしイノシシを挑発する))

猪：((岩の上におり、ダイヤに近づく))

点：((下を向きながら奥に行く))

7:17　猪：((そのまま岩から落ちる))

ダ：((逃げる))

点：((イノシシを見る))

陸：((逃げる))

神：((イノシシに気づき後ずさりする))

7:18　猪：((ダイヤを追いかける))

ダ：ワン！((イノシシに向き直り、一度噛む))

- 点：((イノシシを見ながらイノシシに近づく))
神：((逃げる))
N：((ダイヤが前に行きたがるが鎖を一定の長さ以上は伸ばさない))
- 7:19 猪：((一瞬止まって、ダイヤに体当たりする))
ダ：((来たイノシシの鼻を噛む))
点：((イノシシが接近したのでかわす))
神：((イノシシを見ながらイノシシに近づく))
- 7:20 ダ：((イノシシを離す))
点：((イノシシを見ており、神にぶつかる))
神：((イノシシを見ており、点とぶつかる))
海：ワン！ワンワン！（(隅の方から))
- 7:21 ダ：((顔を噛む))
猪：ブ、ブ、ブイ～。
点：((イノシシに向き直る))
神：ワン！ワン！ワン！（(イノシシの後ろに回る))
N：((ダイヤの鎖を引く))
- 7:22 ダ：((噛みつき、抑えることに成功))
神：((お尻の噛みつきに成功))
点：((お尻を噛もうとするが逃げられる))



図 4-2 ダイヤが噛むことで噛みつきに成功した神

この場面では、乃一会長が母犬であるダイヤを投入した直後の場面である。7分16秒時点では、ダイヤは後ろ足で立つような姿勢になり、イノシシに顔を近づけ威圧感を与えることで挑発を行っている。イノシシはモノが物理的に顔面に近づいたり、目の前で吠え続けられたりすると前に出る習性がある。次の17秒には前に飛び出し岩から飛び降りている。ダイヤは素早く逃げるが、点、陸、神は先ほどのダイヤの動きを見ていなかったためイノシシの動きを予測できず、あわてて逃げている。そして、18秒にイノシシがダイヤめがけて走るが、来たところで顔面に噛みついていて、ここではダイヤは威圧することでイノシシを走らせ、戦略的にイノシシを自分の前まで持ってきて噛みつきに成功している。

ここで注意したいのは、乃一会長の行動である。乃一会長はダイヤの鎖をにぎっており、ダイヤが上述のようにイノシシを噛んだ18秒に、ダイヤがより前に行こうとするが、鎖を一定以上の長さに伸ばさないため行くことができなくなっている。これは意図的な行為であり、ダイヤの行動範囲を制限している。ダイヤが仮に鎖でつながれていない状態で投入されたとする、ダイヤは猟の経験も豊富でこの小さいイノシシであればダイヤのみで仕留めてしまう可能性も高い。ダイヤはあくまで「行動の手本」として投入されているのである。そのため鎖でつながれたままであり、部分的な参加となる。

そしてこの後の19秒では、噛まれて怒ったイノシシがダイヤに体当たりするも、今度はしっかりとイノシシの鼻を噛むことに成功している。これを見た点と神は、噛もうと威嚇体制に入る。この時の姿勢は、図4-1のときのような腰が引けた状態ではなく、前のめりで本気で噛もうとしている様子がうかがえる。実際に、22秒の行動にあるように、神はイノシシのお尻を噛むことに成功している（図4-2）。このように、ダイヤがいない状態では噛みつくどころか攻められる側に立っていた子犬たちが、点は17秒以後、神は19秒以後イノシシおよびイノシシとダイヤのやり取りを見つめたのち、ダイヤの行動を真似ることで噛むことに成功した。ここには犬同士の学習が生じていると見ることができる。

4. 後期訓練

続いての事例は2012年6月12日に行われた訓練映像をイノシシ・イヌ・人のそれぞれの行動をまとめたものである。訓練対象は2010年に生まれたカイ、2011年に生まれた千と千尋の兄妹である。このイヌたちは既に実猟でも使われており、成犬としてみなされているためこうした訓練を後期訓練とする。訓練場所は乃一会長が持っているイヌ小屋に併設された運動場であり、全撮影時間は7分51秒であり、訓練場には乃一会長、智恵さん、優美さんがいる。

訓練の流れとしては、最初にカイのみが放される。放されてから開始10秒で搜索し、追い、噛みつくことができている。また、噛んですぐ離すとイノシシに撥ねられやすく怪我しやすいが噛み続けイノシシを抑えることが出来ている。人為的介入もほとんど見られず、安心して見守っているようにも感じる。中盤になると千尋、後半には千が放され、イノシシを噛み続けた。

- 0:01 海：((放たれて、運動場を走りイノシシを捜索する))
0:09 海：ヴァヴヴ。((イノシシを見つけ噛みつく))
0:10 海：ワン！ワワン！
猪：((噛まれ鳴く))
0:11 猪：((坂の下に逃げる))
海：ワワン！((追いかける))
0:13 海：ワウウウウ！((顔を噛む))
猪：フンガッ。((坂の上に逃げようとするが噛まれる))
0:14 海：ワン！((鳴きながら))
猪：フンガ。((顔を振り回し暴れる))



図 4-4 噛みつきに成功した海

この場面は、海が放されたところから始まる。1秒の時点で海は一直線に運動場を走っており、すでにイノシシがどこにいるのかをおおまかに把握していると思われる。そして開始9秒で鳴くと同時に噛みつきに成功している。その後11秒にイノシシが坂の下まで逃げるもののすぐに追いつき、顔を噛んでいる。イノシシは多少噛まれたところで鳴いたりはしないが、海の噛む力も強いため、イノシシが「フンガッ」と鳴くなどかなり苦しんでいることが分かる。

そしてここで登場している海は、1の初期訓練においてイノシシにはねられて以降イノシシを怖がり、隅に隠れほとんど猟犬として機能しなかった海と同一のイヌである。それが訓練や実猟の経験・学習を重ねその結果としてわずか9秒でイノシシを発見し、噛みつき、鳴くことに成功している。この場面のもう一つの特徴として人による介入行為が全くないことが挙げられる。

第4節 小括

猟犬育成のための「訓練」は、猟師の語りでは重要視されてはいないが、ほとんどの猟師が訓練、あるいはそれに類似した行為を行っているため、必要な行為だといえる。

初期の訓練においては、子犬たちは猟そのものに慣れておらず、筆者が同行した3の場面の子犬の訓練では訓練場の中でイノシシを捜索するだけで50分かかった。イノシシ自体にも慣れておらず、初期訓練の1の場面では子犬たちは腰が引けており、恐怖を感じている様子が映像からも感じ取ることができた。この二つの場面から共通しているのは、「猟欲」が感じられない点である。猟欲とは、猟に対する欲望のことを指し、主体的に猟を行う必要がある海陽町の集団猟において、最も重視されるな能力である。1の場面ではイノシシに対しての態度にはすでに恐怖が現れており、角に追い詰めるものの逃げ腰であり、少しイノシシが動いただけで逃げてしまう。このような状態は「猟欲」があるとは言えない。3の場面は恐怖ではなく、興味・関心を持っていない様子がうかがえる。訓練中の次郎は筆者に近寄って筆者に視線を投げかけた。このように集中力が切れ、遊んでいるような状態では「猟欲」があるとは言えない。

最初は訓練の様子を見守っていた猟師も、捜索、鳴き、噛みの流れがなかなかうまくいかない場合には猟がうまくいきやすいような状況をセッティングしている。これは間接的な介入であるともいえる。2の場面では、訓練対象である海、点、陸の母犬であるダイヤを、鎖をつないだまま投入している。ダイヤはイノシシに顔を近づけることでイノシシを挑発し、岩に登ってしまったイノシシをうまく前にだし、噛みつきに成功している。この様子を見ていた神や点が反応し、先ほど腰が引けていた点も前のめりに攻めることができるようになり、神はお尻を噛みつくことに成功している。他にも状況のセッティングとしての介入にはいくつかのパターンがあり、筆者が同行した訓練では、イノシシが草むらに隠れ、子犬たちが捜索できなかつたため、猟師はイノシシが隠れていそうなところに石を投げた。これは、石にびっくりしたイノシシが、飛び出してくることを期待している。飛び出したイノシシに子犬が気づけば、訓練がスムーズに進むからである。しかし、イヌに対して直接的な介入、例えば条件付けなどは行われていない。こうした間接的な介入の仕方は、この訓練のひとつの特徴であるといえる。

この初期訓練の過程で大事なのが、イノシシに「勝った」と思える経験をさせることである、と乃一会長は言う。この「勝った」という気持ちが猟への「欲望」、つまり「猟欲」につながるのだという。そしてこの「勝った」という気持ちは、イノシシを噛むことから生まれるのだという。すなわち猟師の認識においては、「訓練」を通じて育成を図っているものは、「猟欲」に外ならない。

後期訓練で登場した海は、1の初期訓練においてイノシシにはねられて以降イノシシを怖がり、隅に隠れほとんど猟犬として機能しなかつた姿とは一変して、開始直後に一直線にイノシシのもとに走り、9秒でイノシシを発見し、噛みつき、鳴くことに成功している。初期訓練において、はねられたことでイノシシに対する恐怖から動けなかつた海だったが、点や神がイノシシを噛むことに成功し、イノシシが弱ってくると海も少しずつイノシシに近づき噛みつくことに成功している。こうした経験の積み重ねが「猟欲」を産み出し、後期訓練のような成長をみせたのである。

イヌの欲望である「猟欲」を重視するということは、猟に関わるイヌにある種の「主体

性」を見出しているということである。訓練の際、なかなかうまくいかないからといって、直接的に介入して成功しても、そこにイヌの主体性はない。介入が間接的なものにとどまっているのは、このイヌの主体性を保持するためなのである。そのため猟欲を身に付けたとされる後期訓練における海に関しては、介入行動は一切見られない。この点が警察犬や盲導犬との差異である。警察犬や盲導犬は、むしろ人間の欲望に対して忠実に、そして確実に応答することが必要なのだ。

このように、猟犬の訓練は「猟欲」と表現される、猟に参加するイヌの主体性の育成だと捉えることができる。たしかに初期訓練では特に訓練がスムーズに進まないことも多いため、人による介入が行われる。だが、この介入はイヌに対して直接的におこなわれるのではなく、あくまで訓練がしやすいような環境をつくるという間接的なものだ。これは「猟欲」に必要なイヌの主体性を保持するためである。こうした間接的な介入によって搜索、鳴き、噛みまでの流れを訓練の場で「再現」する。ここでの「噛み」が「猟欲」の生成に関して重要であり、イノシシを噛むことによってイヌは「勝った」という気持ちが「猟欲」を生成すると乃一会長は捉えている。この訓練を繰り返すことで「猟欲」の育成が行われている。

第5章 ブリーディング

第1節 猟犬の評価基準

犬猟において、「犬7割、人2割、銃1割」と猟師の間で言われることから明らかなように、イヌがどれだけ「いい」働きをするかで猟の結果が大きく変わる。そこで本章では猟師の猟犬に対する介入行為の一つであるブリーディングについて記述していく。

「いい」猟犬をつくるということは、猟犬において「いい」とは何なのかという評価基準を明らかにしなければならない。一般的には、例えばペットとしてイヌを見るならば、色や大きさ、毛並が綺麗かどうかなど、まずその容姿がチェック項目として当てはまるだろう。また、イヌ種を判断する際にも体長や毛の色、耳の形など容姿は大きな特徴の一つと言える。

一方で、犬猟においてはどうかであろうか。いいイヌの条件は何か、と猟師に聞くと3章でも説明したとおり、「よく鳴く」「噛みが強い」「捜索ができる」といった行動について答える。猟犬は獲物を得るための手段であり、イヌがどのような行動をとるかが獲物を獲れるかどうかの重要なポイントとなるからだ。つまり猟犬において良いか悪いかの基準はイヌの行動にあるのである。

第2節 猟犬に求められる行動

では具体的にどういった行動でイヌを選別しているのだろうか。これは猟師がどのような環境でどのように猟を行い、イヌにどのような行動を求めているかによって変化する。例えば、単独猟の場合だと、人が勢子と待子の両方の役割をしなければならないため、イヌが好き勝手に動いてしまうと猟自体が成り立たなくなってしまう。そのため人の指示に従う、より忠実な態度や行動が求められる。また、岡山の猟師のAさんは、岡山のゆるやかな山の特徴を利用し、山を数十人で囲い、イヌがどこかに追い込んだところを撃つというスタイルで行っている。ここでは、イヌが鳴いて、追い続けるという行動が求められ、そうした習性を持ったプロットイヌという洋イヌが用いられている。この方法は岡山でこそ成り立っているが、山が険しく山岳地帯の徳島では、山の奥深くまでプロットイヌが追いかけてしまい収拾がつかなくなるという。このように、猟法や環境等によってどんな行動が「いい」かどうかは異なるのである。徳島における集団猟では2章でも記述したように、勢子と待子が存在し、待子が山を囲むように配置された巻狩りの方法で行われている。イヌは、その山をある程度自由に獲物を捜索することが可能となる。この「捜索」は集中力や嗅覚の良さが求められる、猟の際重要な能力である。徳島では過疎高齢化が進み、山地では特に厳しい状況となっているため、集団猟においても参加できる人数が減り、イヌを追いかける力が弱まっているため、イヌが人に獲物の発見、獲物の居場所を伝えるために鳴き、ある程度噛んで獲物を止めておく力も必要になってきている。このように徳島の集団猟では、主に「捜索」、「鳴き」、「噛み」の行動ができるイヌが「いい」イヌとみなされるのである。

こうした認識は、徳島県全体である程度共通の理解がある。今まで県内を10カ所以上仕

事の都合で転勤し、県内各地で猟を行ってきた Y さんは、県内の犬猟状況について、多少の差はあるものの、基本的なやり方は同じであるという。これは、集団で猟を行うので、集団内ではある程度価値観が統一されていること、また、複数の地域の人と一緒に猟を行うことがあるため、複数の地域にまたがって価値観が共有されることが関係していると考えられる。このことがわかる例として、猟犬大会があげられる。

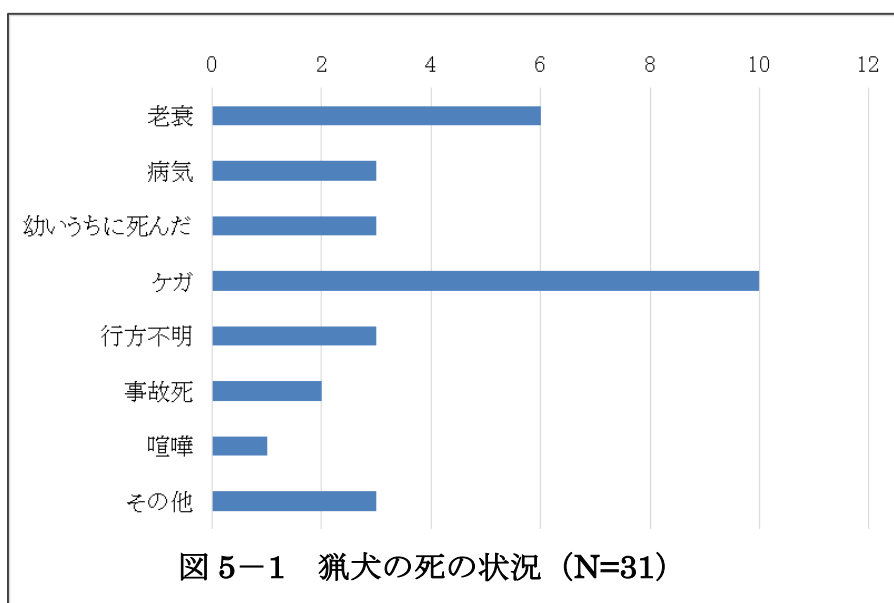
猟犬大会とは、猟犬の行動を点数化し評価する大会であり、これは全国的に存在する。2015年10月11日に吉野川猪犬訓練所施設で行われた徳島県猟友会主催の猪犬訓練大会では、「猟犬を訓練し、狩猟技術の向上を図る」ことを目的とし、県内各地から合計18人の出場者が39頭のイヌを出場させ、優勝を争った。大会では、柵で囲われた会場にイノシシが一頭あらかじめ放されており、その中に猟犬を放し、イヌがイノシシを捜索し、発見次第鳴き、イノシシを追い詰めたところで噛むというのが理想的な流れとなる。競技時間は3分間で、この大会では「捜索」「鳴き」「止め（咬み）」の3つの項目で審査が行われる。こうした大会で優勝等良い成績を収めるともちろん名誉が与えられるが、この大会のためにイヌを育成する人はいない。また、大会でいい成績を収めたからといって必ずしも実猟でいい結果が得られるわけでもない。これは大会での、限られた空間でイノシシを見つけやすく大勢の人に見られている環境と、山での開放的でイノシシがどこにいるか不透明な環境とかなり異なっているためである。大会が好きでいろいろな大会に出場する人もいるが、あくまで力試しという感覚の猟師が多いようだ。

実猟との違いなども見られるが、この大会がそもそも成り立つのは、一定の基準で審査が可能なほどイヌに対する価値観や、犬猟のスタイルが統一されているからである。また、その大会を通して、出場者やスタッフ、観客が、県内外を問わず交流が見られる。こうした情報交換により、価値の共有がなされているのではないだろうか。

第3節 ブリーディング方法

本節では、ブリーディングにおける重要性を述べた後で、具体的にどのようなやり方でブリーディングが行われているのかを、乃一会長の事例をもとに記述する。

ブリーディングが重要視されるのはなぜだろうか。これにはイヌの寿命が大きく関係している。犬猟を行う人は大抵自分で猟犬を飼いならし、繁殖していくが、猟犬は寿命が短い。一般的なイヌの寿命は10歳前後であるが、猟犬の場合は10歳まで生きれば長生きであり、10歳以上生きたイヌは乃一家の場合は一頭しか確認できていない。これは、猟犬は怪我しやすく、図5-1を見ても死因として圧倒的に多い。猟犬は常にケガと隣り合わせの生活を送っているために、猟師は次世代について考え、どれだけ能力を持ったイヌを選別し繁殖させていくかが重要になると考えているのである。



乃一会長は2015年11月現在15匹の猟犬を、自宅と離れたイヌ小屋で飼育している。猟犬の頭数については個人差があり、30頭近く買う人もいれば2、3頭の人もおり、幅広いが海部では5～10頭くらいが平均であるという。幼いころに他人に譲ったイヌを除き、全てのイヌに固有名を付け、テツであれば「てっちゃん」、初なら「はっちゃん」というように愛称でよぶこともある。名づけは兄弟で植物やアニメの登場人物というように関連づけた名前を付けることが多い。名づけに関しては個人差が見られ、乃一会長のように一頭ずつ名づけをする猟師もいれば、名づけはしない場合もある。ただし名づけされていない場合でも個性は識別されており、見分けていない訳ではない。

基本的な飼育方法は一般的なイヌの飼い方とさほど相違はない。生まれて2、3日は母乳を飲み、体内寄生虫の除去や伝染病予防ワクチンを接種させる。エサに関しては各人でこだわりがあり、単純に種類のドッグフードを与える人もいれば、15種類のドッグフードをブレンドし、オリジナルのエサを作る人もいる。イノシシが取れた場合は褒美としての意味やイノシシのおいさを覚えさせる意味でイノシシ肉を与える人もいるが、他のエサ

を食べなくなるからといって与えない人もいる。散歩については頭数が多いので山へ連れて行く場合が多く、また体力をつけるため毎日連れて行く人が多く、多い人では朝と晩に一日2回連れて行くという。

繁殖に関しては基本的に乃一会長が飼っている猟犬同士で交配させることが多いが、それだけだと病気がやすくなってしまうため、他地域の猟犬と交配させることが重要となる。交配はほとんどが管理されており、「盛り」の時期になると交配させる2匹をイヌ小屋の隣にある柵で囲った運動場に放す、あるいは車の荷台に乗せておくといった方法をとる。図は、乃一さんが今まで飼ってきたイヌの中で記録が残っているものを統計図としてまとめたものである。図を見ると交配は一部のイヌに集中していることが分かる。図5-2はイヌの交配歴を不明なものを除いてグラフに示したものだが、半数以上が一度もせず、2回以上交配させるイヌはわずか17%と低いことが分かる。こうしたイヌはどのようなイヌなのだろうか。

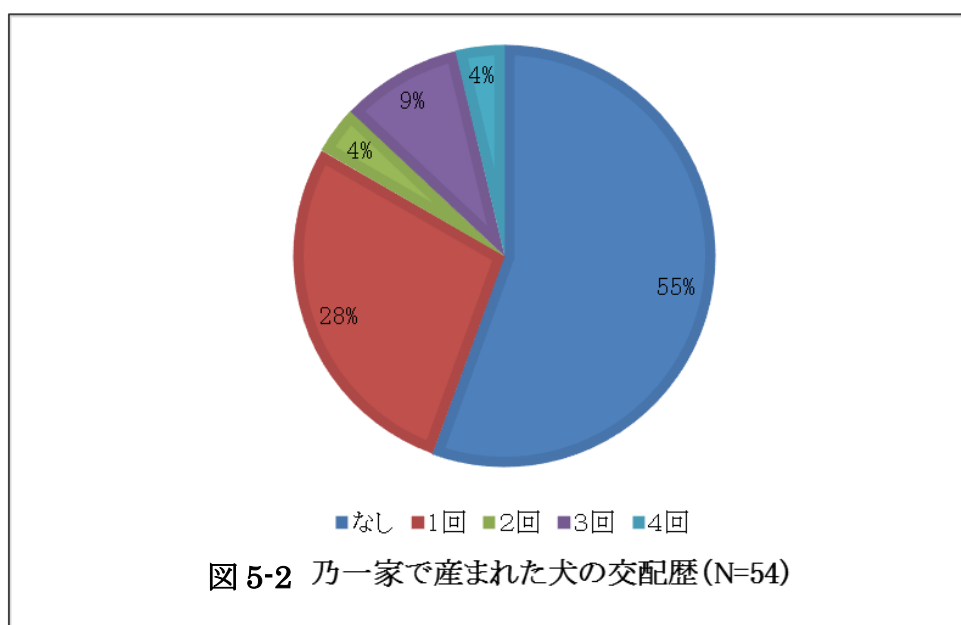
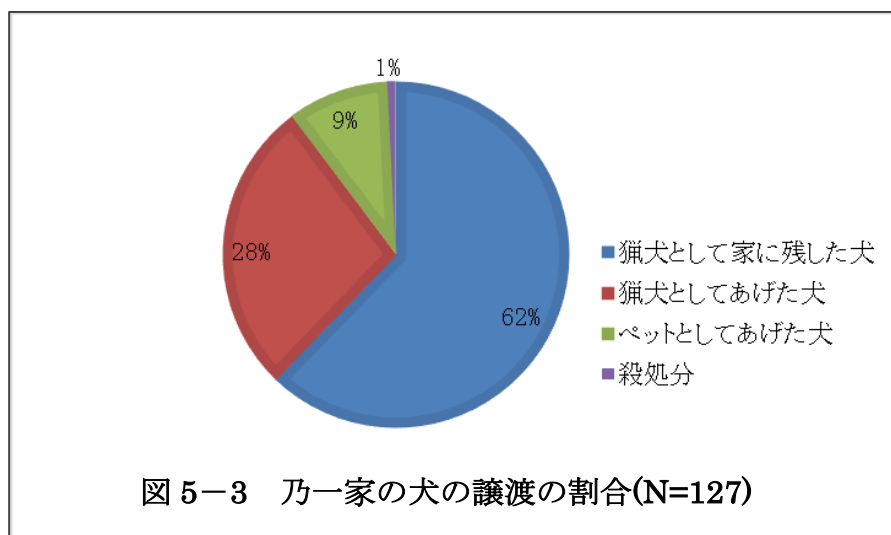


図5-4から、何頭か交配が集中しているイヌを見ることにする。マルは図では一頭しか交配が行われていないことになっているが、これはマルが生きていたのが30年以上前でどのような交配になっていたか覚えていないためであり、実際はもう少し多い交配歴である。乃一会長は「マルは血全部の上」といい、事実、図4-4を見ても、交配相手以外はこのイヌのすべての祖先である。マルは特に鼻がよく、猟に行く日は朝猟に行く予定の山を歩いて大体イノシシが通った跡などを探し、場所の検討をつけるのだが、マルがいた当日は前日の夜、マルを積んで車で山を走ることによって代用していた。これはつまり、マルがイノシシが通った跡を見つけ鳴き教えてくれることで場所の検討がついたということだ。しかもシカやサルなどは一切鳴かずイノシシのみに鳴いたのでわかりやすかったという。他のイヌは鳴いてもシカなども鳴くためわかりづらいのだそうだ。それくらいマルは鼻がよく、また噛みも得意だったため乃一会長は今までのイヌで「一番えらかった」と話す。

図 5-4 の左上の方に位置するテツ 1 は 3 頭交配させており、搜索、鳴き、噛み全てが優秀なイヌであったと言われた。テツの子供も優秀な 1 とついているのは他にもテツと名づけられたイヌが多くいるため、区別するために筆者が独自につけたものだ。テツが他の名前に比べて多いのはテツ 1 が優秀であったために次にテツ 1 と同じ灰色のオスが生まれるとテツとつけるからで、テツと同じ容姿であれば優秀なイヌになるのではないかとといった期待が込められているのではないかと予想される。そのため、第三章で灰色のイヌはいいといったジンクスがあると述べたが、それはこのテツから始まっている。テツの子は 14 頭いるが、そのうち 2 匹を除いてすべてのイヌが猟犬として使われている。しかし、必ずしも同じ能力を持っているわけではなく、サツキとの子供であるセレスは脚力に富んでいる。椿との子供であるりんごは搜索と鳴きがよく、ペルとの子供のハッピーは噛みに優れていた。また、両親が同じであつてもりんごは搜索と鳴きに優れていたため 4 匹のイヌと交配しているが、姉妹のいちごは猟犬としては使うことができず、ペットとして譲渡されている。

このように、意図的に交配をさせてはいるが、ブリーディングが必ずうまくいくとは限らない。図 5-4 中央のサクラは、搜索が得意で 3 頭と交配を行ったが、子どもは搜索が出来なかったという。また、図 4-4 右下のダイヤは他のメスと排卵の時期が異なっていたため勝手に子作りしてしまったのだという。このため交配相手が分からず「？」となっている。このようなイヌに対し、乃一会長は勝手にできた子犬を手放したり、うまくいかない子犬を即座に殺処分したりはしない。乃一会長はまず 1、2 年の期間をおいて猟犬としての機能を果たすことができるイヌであるのか、前章の訓練を通して判断する。これは、1、2 年たってようやく猟犬としての性格や能力が決まってくると考えているからである。そして、猟犬として向いていないと判断されたイヌのみがペットとして知人に譲渡されるのだという。

図 5-3 は乃一家のイヌがどのくらいの割合で譲渡されているかをまとめたものであり、これを見ても猟犬として飼育する以外はほとんどがペットとして譲っていることが分かる。また、一事例ほど殺処分があつたが、以前は猟犬として使えないイヌのほとんどが町役場に持って行き殺処分をしてもらっていたのだという。しかし動物愛護団体の反対等により町役場の引き取りが厳しくなったほか、娘さんの反対もあり今はほとんどしていない。この一件の殺処分は、蘭というイヌだが、搜索犬として猟に出ていたが怪我をして歩けなくなってしまった。猟犬としてはもう使えず、しかし歩けないイヌを譲るわけにもいかずしょうがなく殺処分という形になったのだそうだ。



第4節 小括

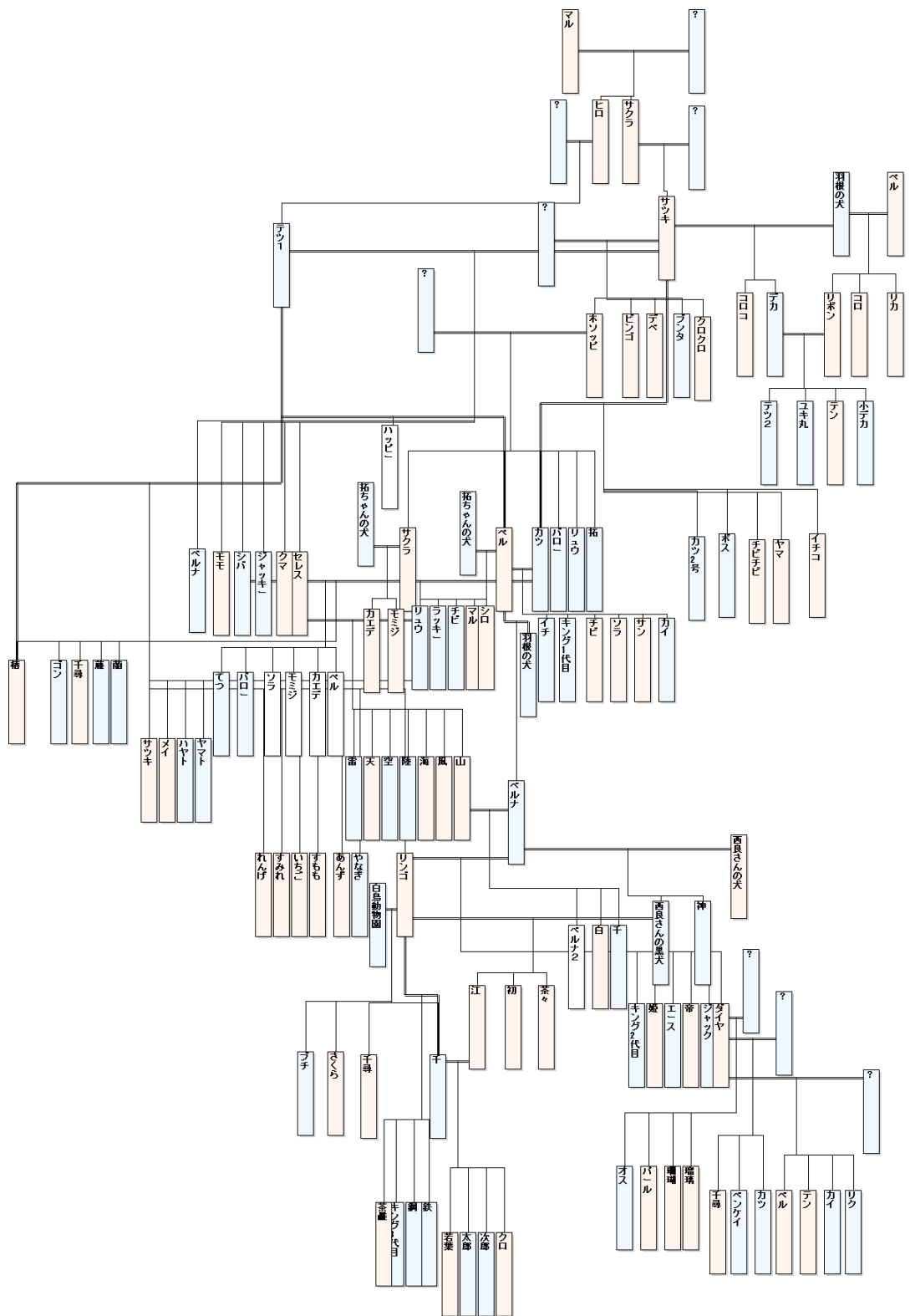
本章では、猟犬を育成するために猟師がどのようにして、どのような基準を持って繁殖を行っているのかについて記述した。まず、イヌの育成は犬猟を行う猟師にとっては獲物が取れるかどうかの結果に直結するため最も重要なことであり、多くの猟師もそう認識している。どのような犬が「いい」のかについては猟法や環境によって異なるが、徳島県内の集団猟においてはある程度犬の評価基準が共有されている。その評価基準とは、主に「搜索」「鳴き」「噛み」である。こうした能力について猟師はもともと持っている能力とみなしており、また猟犬は寿命が短く常に次世代の犬を作っていかなければならないため、ブリーディングが猟師の語りの中で非常に重要となる。この意味で、ブリーディングは「能力」の育成を意図したものだといえる。

ブリーディングの方法は基本的には猟師が「いい」と思うイヌ同士を交配させるという至ってシンプルなものである。そのため、イヌの交配歴には差が出来、一度も交配させないイヌもいれば、4回も交配したイヌもいる。交配の相手に関しては、病気にかかりやすいなどのリスクがあるため自分が飼っているイヌ同士だけでなく、県内外問わず猟師の間でイヌの交配が行われている。

しかしこのブリーディングは、科学的な知見に基づいたものというようなものではなく、飼い主の好みやジックスなど、非常に曖昧なものである。また、「行動」の遺伝というのは、もともとの能力だけではなく、環境という多様で複雑な要因があるため、単純に遺伝するものではない。搜索、鳴き、噛み全てが優秀なテツの子供であるセレスは脚力に富んでいる一方、りんごは搜索を得意とし、いちごは猟犬としての能力を発揮することができなかったといった事例も存在した。

そうであるにも関わらず、なぜ猟犬の育成が長い間成り立ってきたのだろうか。そこには、人とイヌの相互的な関係が見られる。乃一会長の事例では、生殖管理とはいっても先述したように非常に曖昧な面があるため、人が期待したような行動が子犬において見られない場合がある。また、イヌが勝手に子犬を産んでしまう場合もある。どのような場合でも、1、2年の期間猟犬として使っていくことができるかどうか実践型の訓練を通して、ブリーディングによる「能力」を見極め、その犬が猟においてどのような性格を持ち合わせているのかを考慮して実猟で使われ、適していないと判断されたイヌのみがペットとして譲渡、あるいはまれではあるが殺処分される。このようにブリーディングは「能力」の育成を意図した介入であるが、その方法の曖昧さから「能力」の育成としての機能は発揮しておらず、訓練を通じて適性を図るというセレクションが行われているのである。

図 5-4 乃一家の飼育されてきた犬の家系図



第6章 結論

第1節 まとめ

一般的に、イヌというと、「生きた道具 [シッフマン 2015:221]」とも言われるように受動的で、人の指示に忠実な道具的存在であるとの認識がある。しかし、犬猟の現場においては、イヌと人が相互に次の行動を示唆する合図を出し合い、互いに働きかけあう場面が多く見られた。事例では、イヌのリードをつける・はずすという行為が一つの合図となっている。イヌにとって、犬猟の開始はトラックに乗って移動しているときから始まっており、この事例においてもイヌの志向は常に山の方に向けられており、獲物のにおいをさがしていたと思われる。しかし、イヌはそのまま山に走ろうとしたりはしない。これは、行動開始の合図、つまりリードが外されていないからだ。イヌはリードを外されると捜索に走り出す。この合図を機に、イヌは自由に捜索を行う。また、イヌが捜索に出かけ、獲物が見つからない場合、一度猟師の元へ戻ってきた。このときイヌは猟師に志向を合わせ、猟師の「指示をしない」という行為からまだ猟の終了の合図が出ていないと判断し、再び捜索に戻っている。イヌが鳴いた際は、待子が待機場所を移動するという行動変化が起きた。ここには「鳴く」ということが、獲物の発見の合図であるという前提がある。この行為が合図として成り立つためには、それが合図であるという双方の認識がなければならない。乃一会長は何十年と犬猟を行い、事例のイヌとの猟だけでも何十回という経験があり、そこから両者の間で確立された猟の流れがあるのである。そのため、イヌの「鳴く」行為に関して、獲物以外のものに反応しているという事態は考慮せず、獲物の発見の合図だと断定し、行動に移している。これは、山を登る際の筆者とイヌの関係と比較するとわかりやすい。筆者は、イヌと山を登る際、イヌが筆者を引っ張って進んでほしいという筆者の気持ちとは裏腹に、イヌは急に立ち止まったり、かと思えば急にダッシュしたりとイヌの行動を予期できない状況にあった。ここでは筆者のリードを引っ張る、あるいは呼びかけといった行為が、イヌには「前に進め」という合図として認識されていない。この違いが、初めて犬を連れて山に入った筆者と何十年と猟をしている猟師との過去の歴史の差なのである。

しかし、この合図は、人が直接的にイヌに介入を行うものに関しては非常に少ない。この分析により確認できた介入は全体の撮影時間 39 分のうちわずか 1.8%であるといえる。太田 (1995) は、トゥルカナの牧童によるヤギ群の統率がいかに行われているのかを調べるために、牧童の一日の統率行動を記録した結果、ヤギ群に対して牧童が統率行動をとった時間はわずか 1.28%であった。トゥルカナでは、ヤギは自律的にまとまりあうという習性や、親和性の強い母子関係を利用したことがこのような介入行動の少なさにつながっていると結論付けている。

このことは、犬猟に関しては、この介入行動の少なさはどう説明されるべきであろうか。これには、訓練が関係している。初期訓練では特に訓練がスムーズに進まないことも多いため、人による介入が行われる。この介入はイヌに対して直接的ではなく、訓練のしやすい環境をつくるという間接的なものだ。これは「猟欲」に必要な主体性を保持するためである。こうした間接的な介入によって捜索、鳴き、噛みまでの流れを行う。この噛みが「猟欲」に関して重要であり、イノシシを噛む行為は、イヌに「勝った」と思わせるのだと乃

一会長は語る。このイノシシに「勝った」という気持ちが「猟欲」の生成につながり、訓練を繰り返すことで主体的な猟の参加者として成長していくのである。

また、イヌの「能力」の育成を意図した介入として、ブリーディングが存在する。「能力」は所与のものとされ、猟犬は寿命が短く常に次世代の犬を作っていかなければならないため、ブリーディングによって、「能力」を保持、あるいは高めていくことが重要とされる。猟犬に必要な「能力」というのは、主に「搜索」「鳴き」「噛み」などの猟に適した行動である。

しかしこのブリーディングは、科学的な知見に基づいたものというようなものではなく、飼い主の好みやジックスなど、非常に曖昧なものである。また、「行動」の遺伝というのは、もともとの能力だけではなく、環境という多様で複雑な要因があるため、単純に遺伝するものではない。実際に、搜索、噛み、鳴きすべてが優秀なテツの子供であるセレスは脚力に富んでいる一方、りんごは搜索を得意とし、いちごは猟犬としての能力を発揮することができなかったといった事例も存在した。産まれた犬は、実践型の訓練を通して、その犬が猟においての性格がどのようなものなのかを考慮して実猟で使われ、適していないと判断されたイヌのみがペットとして譲渡、あるいはまれではあるが殺処分される。

猟師は猟で大事なものは「犬 7 割、人 2 割、銃 1 割」だと、イヌのブリーディングの重要性を語る。しかし実際のブリーディングの方法は非常に曖昧であり、「能力」の育成としての機能を果たしてはいない。それでも「能力」が保たれているのは、訓練の場においてセレクションが行われているからなのである。そうであるため、猟師にとって本当に必要なイヌの「能力」は、行動ではなく「猟欲」であるといえる。

「猟欲」とは、狩猟への欲望、すなわち主体性であるといえる。犬猟において人による介介入行為が非常に少ないのは、イヌが猟の行為主体として積極的に猟に参加しているからだといえる。事例から見ても、人の介介入行為が見られたのは、猟の開始の合図であるリードを外す前と、猟の終了の合図であるリードをつける行為や、犬笛を吹く行為の以後である。つまり、人がイヌに対して介介入行為を行うときは、猟以外の場面であり、猟中はイヌがエージェントとなるのだ。

ただし、このエージェンシーは、訓練を通じて人の手によって作られている。この犬猟の場において、「つくられたエージェンシー」としてのイヌと、人の働きかけあいによって、猟は成立しているのである。

第2節 考察

本研究では、徳島県海部郡海陽町で行われている犬猟を事例に、イヌのドメスティケーションの過程を、人の側からの一方的な働きかけとしてではなく、現在進行形の「相互的すり合わせ」の過程として捉え、そこでの人とイヌの「相互行為」の過程を考察した。その際、イヌに関しては、これまでのドメスティケーション研究において指摘されてきたような、動植物側からの人に対する「介入許容」という意味での消極的な働きかけを越えた積極的な働きかけがあると仮定し、イヌの積極的な働きかけにもとづく人とイヌの相互行為の諸相をアッサンプラージュという概念を用いて検討した。犬猟の場においては、人とイヌの「相互行為」が成立していた。犬猟における猟犬は、エージェンシーを発揮し、自由に山中を駆け回って獲物の捜索を行う。このような猟法が可能となるのは「猟欲」と呼ばれる狩猟に対する欲望が、イヌに内包されているからである。しかし、この「猟欲」は訓練によって、意図的に人が作り出されたモノであり、人はこれを「道具」として利用していた。だが、この「つくられたエージェンシー」は、つくった本人に対して、エージェントとして働きかける。イヌは獲物を発見すると合図として鳴く。人はそれに応答して待機場所を変更し獲物が逃げ込んでくるのを待つ。また、イヌが捜索に出かけたものの獲物が見つからず、猟師の元へ自ら戻ることがある。このとき人がどのように対応するかによって、イヌも捜索を続けたり、人に寄り添ってついて歩く。このように人とイヌが互いに「エージェント／ペーシェント」の関係を攪乱し、多層的かつ反復的な関係を見せる。このように見ると、猟犬は、エージェントのようでもあり、ペーシェントのようでもある。このような犬猟の場は、「つくられたエージェンシー」をもつ道具としてのイヌと人とが相互に働きかけ合う、動く連なりとしてのアッサンプラージュとしても見ることができる。

そしてこの性質は、ジェルの傀儡人形の再帰的経路を見ることでも説明できる。模倣呪術と感染呪術を組み合わせた呪術では、「プロトタイプである呪術の被害者に似せたイメージに、その身体の一部が埋め込まれて作られた傀儡人形[内山田 2008:14]」は被害者に危害を加える。ジェルは、この傀儡人形をインデックスと理解し、被害者が傀儡人形の表象の中に刻印されているとした。図は、ジェルの傀儡人形の再帰的経路を内山田が図式化したものである。被害者は自分のエージェンシーの働きによって、エージェントとペーシェントの連鎖の中で、最後に災厄を被るペーシェントとして現れる[Gell 1998, 内山田 2008]。これは犬猟であれば、まず人はエージェントとしてイヌのブリーディングや訓練を行い、狩猟の場ではエージェントとしてイヌを「道具」として利用する。しかし、この二つ起点には、イヌから人への働きかけが存在しているのである。そして、この人とイヌの再帰的経路が繰り返されることによって、犬猟が成り立ってきたのである。

この再帰的な関係は、人とイヌのドメスティケーションを考えていくうえでも変わらない。従来人がイヌを馴化し、イヌを猟犬や番犬として利用してきたことでイヌの家畜化が進んだと言われてきたが、そこにはイヌから人への働きかけが存在していたのである。しかもそれは介入を許容するような、受動的で消極的な働きかけではなく、より積極的な働きかけである。そして人とイヌ、両者の関係は相互的で現在にも続く通時的なものとして見ることを可能にするのだ。

本研究では、ドメスティケーションの議論の中にアッサンプラージュという概念を用いることで、空間的で共時的な相互行為だけでなく、時間軸上に広がる通時的な関係性にま

で広げることが可能にした。アッサンブラージュという新たな視座は、今後のドメスティケーション研究においてヒトと動植物の関係性をより深みのあるものとして捉えることができるだろう。

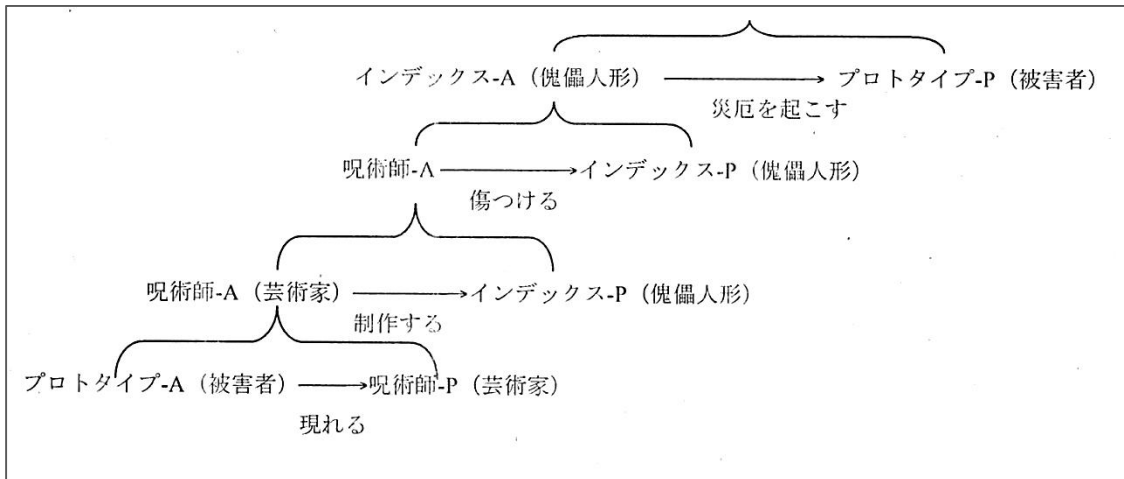


図 6-1 エージェンシーのパラドックス：二度現れるプロトタイプ（被害者）
A はエージェント（動作主）、P はパーシエント（受け手） [内山田 2008:15]

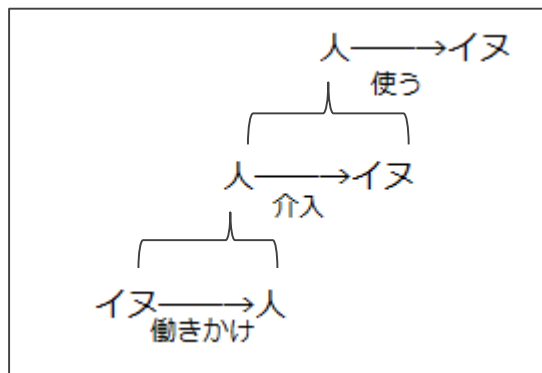


図 6-2 人—イヌ関係におけるエージェンシーのパラドックス

参考文献

- Donna, Jeanne Haraway, 2003, *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*, Prickly Paradigm Press
(=永野文香(訳), 2013, 「伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」」以文社)
- Gell, Alfred 1988, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford University Press
かのよしのり, 2015, 「はじめての狩猟マニュアル」コスミック出版
- 木村大治, 2003, 「共在感覚—アフリカ二つの社会における言語的相互行為から」京都大学
学術出版会
- 久保明教, 2011, 「世界を制作=認識する—ブルーノ・ラトウール×アルフレッド・ジェル」
春日直樹(編)『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ』世界思想社, 34-53
- Konrad Zacharias Lorenz, 1966, *On Aggression*, Methuen
- Malinowski, Bronislaw 1922, *Argonauts of the Western Pacific*, Routledge and Kegan
Paul.
- 松井健, 1997, 「自然の文化人類学」東京大学出版会
——, 2011, 「セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考」人と動物選書
- Miklosi, Adam 2009, *Dog behavior, evolution, and cognition*, Oxford University Press
(=藪田慎司監訳, 森貴久, 川島美生, 中田みどり, 藪田慎司訳, 2014, 「イヌの動物行
動学—行動、進化、認知」東海大学出版部)
- 西阪仰, 2010, 「道具を使うこと—身体・環境・相互行為」串田秀也・好井裕明編『エスノ
メソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社 36-57
- 奥野克己, 2015, 「プナンのイヌ—人の道具であり、人に近い非人間」『日本文化人類学会
研究大会発表要旨集 日本文化人類学会第 49 回研究大会』
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasca/2015/0/2015_B13/_article/-char/ja/, May 13,
2015)
- Pat Shipman, 2015, *The Invaders: How Humans and Their Dogs Drove Neanderthals to
Extinction*, Belknap Press
(=河合信和(監訳), 柴田譲二(訳), 2015, 「ヒトとイヌがネアンデルタール人を絶滅させ
た」原書房)
- 坂本寧男, 2009, 「栽培植物とは何か」山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物
学的研究』国立民族学博物館, 17-34
- 重田眞義, 2009, 「ヒト—植物関係としてのドメスティケーション」山本紀夫(編)『ドメス
ティックーション—その民族生物学的研究』国立民族学博物館, 71-96
- 太田至, 1995, 「家畜の群れ管理における「自然」と「文化」の接点」福井勝義(編)「地球
に生きる—④自然と人間の共生」雄山閣, 225-248
- 谷泰, 1995, 「家畜の起源をめぐって—考古学的意味での家畜化とは何だったのか」福井勝
義(編)「地球に生きる—④自然と人間の共生」225-248 雄山閣
- 谷泰, 2010, 「牧夫の誕生—羊・山羊の家畜化の開始とその展開」岩波書店
- 内山田康, 2011, 「《特集》動くアッサンブラージュを人類学する—序」『文化人類学』

76(1)1-10

内山田康, 2008, 「芸術作品の仕事—ジェルの反美学的アブダクションと、デュジャンの分配されたパーソン」『文化人類学』73(2)1-34

内山幸子, 2014, 「イヌの考古学」同成社

吉田ゆか子, 2011, 「仮の面と仮の胴—バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ—」『文化人類学』76(1)11-32

参考 web サイト

大日本猟友会 HP、2005 年 8 月 1 日掲載、(<http://www.moriniikou.jp/>) 2016 年 1 月 12 日
閲覧

ハングリーハンター、犬猟規制の通達、

(<http://homepage3.nifty.com/hungryhunter/law/ksy410.html>) 2015 年 12 月 18 日閲覧

海陽町、2011 年 4 月 19 日掲載、海陽町プロフィール

(<http://www.town.kaiyo.lg.jp/>) 2016 年 1 月 28 日閲覧

警視庁 HP (<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/index.htm>) 2016 年 1 月 16 日閲覧

日本盲導犬協会 HP (<https://www.moudouken.net/index.php>) 2016 年 1 月 25 日閲覧

徳島県 HP (<http://www.pref.tokushima.jp/>) 2015 年 12 月 20 日閲覧

National Geographic、“人間は犬に飼いなされた?”、2013 年 3 月 4 日掲載、

(<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/7644/>) 2016 年 1 月 28 日閲覧